

吾人は人の功勞の多少を討究すれども如何なる徳義の程度を標準として之をなすかを深く省察すること  
 なし吾人は其人の勇まじきか富るか妍よきか熟練なるか揮毫を善くするか朗吟に巧なるか又善く業を務むるかを探れども彼はいかにばかり心に貧しく如何ばかり忍耐柔順にして又如何ばかり虔信聖潔なるかを論ずること稀なり素性の人はその外面を重んずれども神恩を傾けたまへば目を其内に注ぐ彼は屢は誤らるれども是は神に信託するが故に欺かるゝことなし

三五六

第三十三章 自己を棄て凡ての邪慾を去る  
 一 我子よ汝もし完く己を捐てざれば充全なる自由を持  
 二 のこと能はざるなり  
 單に自己の利益のみを求めて自ら愛するものは皆畢竟鐵鎖は覆がるものなり斯るものは貪慾にして奇を好み東西に奔走し常にイエス、キリストの事を求めずして軟易甘美のものを求め永續せざることを毎時計畫せり蓋し神に因らざるものは皆亡ぶべきなり

第三十三章 自己を棄て凡ての邪慾を去るべき事 三五七



汝宜しく短簡にして盡せる左の格言を守れ「萬物を棄つべしさらば汝萬物を得ん」「私慾を去るべしさらば爾安息を得ん」と爾深く之を鑒み之を成し遂げた時時は凡ての事を曉るべし

- (二) 生よ是れ隻日の事業にあらず又兒童の游戲にもあらざるなり否却て篤信なる人の完成は悉く此簡短なる語の中に含蓄せらる

- (三) 我子よ爾完成なる人の途を聞て回避し若くは忽ち落

膽ずることなく反て奮て高尙なることを求め或は冀望に於てなりとも是等を慕ふべし  
我は願ふ汝の此點に達し斯の如くありて既に自ら愛するものたらず常に準備をなして唯われと我撰て汝の教父となしたる者の指揮にのみ従はんことをされば汝はわが心に適ふものとなり汝の生命は凡て喜悅と平和に過ぎん離棄すべきもの尙汝に多し汝全く是等を我に遺棄せざれば希望の點に達せざるべし  
我なんぢに勸む汝富をなさん爲に我より火に燬たる



二番前一  
〇二八

ホ太十三  
〇四六

金を買へとは是則ち天の智慧にして凡て賤しき物を足下に蹂躪するものなり地上の智識を軽んじ他人と自己とを悦ばすことを深く好むこと勿れ鄙賤なるものを買ふには人の尊み重する物を以てせざるべからずとは我云ひし所なり何となれば真なる天の智慧は甚だ賤くして貴からず人の意に留らず又自ら重せず地上の顯榮をも求めざるが故なり口を以て之を稱美すれども其生命に於ては之に遠かる人實に多し然れどもこれ衆人に隠れたる貴き眞珠なり

第三十三章 心の輕浮なること及び終局の

志望を神に向はしむべき事

(一) 我子よ爾の感情に信託すること勿れ何となれば是れ今は如何にあるとも速に他の感情に豹變し易ければなり汝之を欲せずと雖も爾の活る間は變遷を受けざるを得ず故に爾一時は快活なるも後には憂鬱し一刻は靜なるも又騒ぎ今日は虔信なるも明日は不虔となり今日は謹慎なるも明日は忽諸となり今日は嚴肅なるも直に輕躁となるなり

イ伯十四  
〇二



(二) 然れども堅くして能く聖靈の薫陶を受けたる者は是等の變ずべきものに遭ふも確然として移らず自らは如何に感ずるか又變遷の風は何れに吹き行くかを顧みずして其心意の希望全く正義最良の目的に向ふなり何となれば彼は斯くして幾多の事變の間に於ても絶えず專一なる其志望を我に向けて同一不動を守ることを得ればなり

斯る人は其志望の眼愈淨ければ益堅固にして患難の暴風通過するなり

ヨハネ十四  
口六六〇  
三二

然れども人多くは清き志望の眼を瞽くし容易に其逢ふ所の快樂の爲に誘はるゝなり蓋は私利を謀る凡ての過の完くこれなきものを得ること稀なればなり斯の如く昔時エズヤ人がベタニヤのマルタ、マリアの家に来りたるは唯イエスの爲のみにおらずして又ラザロをも見んが爲なり

是故に人は志望の眼を清くし之をして專一に正義ならしめ中間に挟まる凡ての雜物に超えて我に向はしむべし

ハ約十二  
九  
二



第三十四章 神は己を愛する者の爲には萬

物に超え萬事に於て甘美なる

事

(一)「われに神あり萬物あり」とわれ又何をか欲し何の

幸福をか望まん道を愛して世と之に在る物を愛せざ

る者の爲には此語は甘くして味美き哉

「我に神あり萬物あり」との語は聰明なる者の爲には

言既に足る而して愛する者は屢これに反言するを

を樂しまん何となれば爾在すときは萬物歡樂を生

イ約書二  
の十五  
八の十二

口番前  
〇二十

第三十四章 神は己を愛する者の爲には萬事に甘美なる事 三六五

と爾在ざる時は物皆懶さが故なり爾は心の靜寧と多

くの平安と歡樂を予へ吾人をして凡ての事に於て善

き感情をもたしめ萬事に於て爾を讚美せしめ給ふ又

爾なくんば何物も永く樂を生せず若し樂しく且味

あるものを欲せば必ず爾の恩恵加はり爾の智恵の甘

美を以て調和せざるべからざるなり爾の甘美を嗜む

もの爲に何物が當然味ひなからん又汝の甘味を嗜

まざる者の爲に何ものか樂しからん

世の知者と肉の事物を嗜むものは爾の智恵に乏し何



となれば甲には虚榮の心多く乙には死あるが爲なり  
然れども世の事物を輕んじ肉を亡して汝に従ふもの  
は實に智しと知れたり蓋は彼等は虚榮より眞理に越  
に肉より靈に移りたればなり斯るものは神の甘美を  
味ぶものにして受造物に於て如何なる善事を見出す  
とも全く之を創造者の讚美に歸するなり而して創造  
者の甘美と受造物の味に比すれば時と永遠の如く自  
然の光明と燭されたる明のごとく實に大なる差別あ  
るなり

(二) 嗚呼永遠なる光明凡て造れたる明に優れる主上願く  
は汝の光輝を天より發射し凡て我心の奧秘を射照し  
其機能を盡して我靈を淨め之を喜悅ばしめ之を照し  
之を活し滿たる喜悅を以て主に結ばしめ給へ嗚呼爾  
われと俱にいまして我を満足せしめ萬事に超えて全  
く我を喜ばせ給ふ其福なる冀望の期は何時か來ら  
ん我之を得ざる間は至き喜悅を得ざるべし  
然れども如何にせん舊き人は尙わが中に生活して完  
く十字架にかゝらず又完く死に到らずして未だ勁く



水詩八九  
〇九  
〇二六  
ト詩六八  
〇三十

靈と戦ひ心に内亂を興して我魂の國の平和を妨ぐ  
るなり

爾海の力を理め其波浪の起るを諍め給ふ者上起つて  
我を助け戦亂を欲する民衆を打散し汝の權力を以て  
彼等を碎きたまへ主なるわが神よ願くは爾の權威を  
現はして汝の右手を尊ましめ給へ何となれば汝の外  
に我望なく我避所あらざればなり

第三十五章 今世に於ては誘惑を避くべき  
所なき事

一 伯七〇  
〇七

(一) 我子よ汝は今世に於て嘗て安泰なることなく命ある  
間は常に靈の鎧を要すべし汝は仇敵の中に栖みて右  
よりも左よりも攻め襲はる

此故にもし忍耐の楯を以て其四面を禦がざれば長く  
瘡なき事を得ざるべし加之爾もし心を定てわれに  
向ひ我爲に甘んじて萬事を忍ぶ決心なき時は激烈な  
る此戦鬪に耐へ又彼の福なる者の勝利にも達し得ざ  
るべし故に爾は勇ましく萬事を通過し如何なる汝の  
敵に對しても強き手を備ふべし

第三十五章 今世に於ては誘惑を避くべき所なき事 三六九



蓋は克つものにはマナを興へられ情者には多くの艱  
難を残さるればなり

(二) 爾もし今世に於て安息を求めば如何にしてか氷遠な  
る安息に達せん 志を多くの安息に置ずして大なる  
忍耐を念ひ又誠なる平安を求めこれ地にあらずして  
天にあり又人にあらず凡て他の受造物にもあらず唯  
神にのみあり

神を愛する爲には欣然萬事を受くべし 則ち各種の勞  
(一) 苦、悲哀、試誘、心痛、憂愁、貧乏、疾病、毀害、

誹謗、非難、輕侮、恥辱、譴責及び凡ての凌侮を受  
くべきなり 是等は徳を助くるもの新しく基督に従ふ  
ものを試むるもの又天の冕を組立るものなり 我は短  
き勞苦の爲に永遠の酬を興へ輕き恥辱の爲に涯りな  
き榮光を予へん

(三) 汝は意のごとく常に靈の慰を有んと念ふや我聖徒に  
は常にかゝるものなくして多くの患難と雑多の試誘  
と大なる悲憂ありたり 然れども彼等は凡て是等の事  
に堅忍し 此時代の患苦は未來の榮光に較ぶべきにあ



らざるを知るが故に神を頼みとして己をたのまざり  
き汝は衆人が多涙多勞の後辛ふじて得たる所を汝一  
朝にして得んと欲ふや

須らく主の來臨を待ち勇ましく戦ひ勇氣を奮ひ神を  
疑はず汝の地位を離れず神の榮光の爲に汝の身も  
魂も絶えず曝露すべしさらば我最豊かに汝に報ひ  
凡ての患に於て汝に伴はん

第三十六章 徒なる人の批評を懼るべから

ざる事

(二) 我子よ汝の心を堅く主に置き良心汝の盡忠と潔白を  
證する時は人の批評を恐るゝこと勿れ

斯の如く惱を受るは有益にして福なることなり又自  
らを頼むよりも神を頼とす謙遜の心には是れ苦し  
きことあらざるべし人は多く多辯の癖あるが故に其  
云ふ所信じ難し況また一人にして諸人を満足せしむ  
ることを得んや

パウロは主の爲に努めて凡ての人を憚ばせ衆人の状  
態に循ひしと雖も彼は人の批評に是非せらるゝこと

第三十六章 徒なる人の批評を懼るべからざる事



三 三十一  
二 三十二  
一 三十三  
三 三十四  
二 三十五  
一 三十六

ト 三十一  
二 三十二

を最も細事となせり彼は力を盡して可成的他人の教訓と拯救の爲に働きたり然れども時として他人の批評と輕侮を得けざるを得ず此故に彼は萬事を知りたまふ神に萬事を依托し不義を云ひ嘘忘なることを思ひ縦に驕るものに對しては忍耐と謙遜を以て自ら衛りたり然れども時としては答をなしたりこれ恐らくは弱き者其無言なるを見て誤ることなからんが爲なり

(三) 汝は何人なれば死すべき人を恐るゝか彼は今日ある

三 三十一  
二 三十二  
一 三十三

十二 三十一  
十一 三十二

六 三十一  
五 三十二

(二) とも明日は見ざるなり神を畏れよされば人の恐怖の爲に躊躇するを要せざるべし人の妄言輕侮は安んぞ汝を害するを得んかれは汝を害するよりも却て自ら傷ひ彼は如何なる人たりとも神の審判を避るに足ざるべし汝只管に神を目前に置いて氣短きことばと共に争ふこと勿れ而して目下は人に負け受くべからざる恥辱を蒙るとも是が爲に歎ずる勿れまた短慮の爲に汝の冕を小くこと勿れ却て天に在る我に汝の目を擧ぐべし我は則ち凡ての羞恥と害より汝を救ひ其功



勞は應じて各人に酬い得る者なり

第三十七章 心の自由を得んために完く自

己を捐ぐ事

- (一) 我手よ自ら棄べしさらば我を得ん如何なるものをも自ら擇まざる如何なるものをも己に歸することなく堅く立てよさらば利得常に汝にあらん何となれば汝翻りて自己を再收せざれば汝自己を捐ると共に更に大なる恩惠汝に加へらる可ければなり
- (二) 主よわれは幾度か自ら捐て又如何なる事に於て自ら

三捐つべし

主曰く常にすてよ時毎にすてよ大事にも小事にも自ら棄つべし我は其一端をも除かず唯汝の萬事を離れて虚緒ならんことを冀望す汝もし中にも外にも凡ての私意を脱せされば争でか汝わがものたり我又汝のものたるを得ん汝之を行ふこと早ければ益 幸福なるべく之を爲すこと充然誠實なれば我を悦ばすこと倍深く汝の利得も亦更に大なるべし

或人は己を捐るに例外を設く是れ其全き信憑を神に

第三十章 心の自由を得んために完く自己を捐へき事



置かず自ら準備するの法を講せざるが故なり又始は  
 萬事を供托するも後日誘惑の襲ふ所となりて再び舊  
 慣に復し是が爲に徳義の路を進歩せざるものあり是  
 等の人もし初めに全く己を棄て日に己を捧げて我を  
 祭らざれば決して清き心より生ずる眞正の自由及び  
 最も甘き我親陸の恩顧に達することなかるべし若し  
 これなければ我と合して一となり饒に實を結ぶこと  
 能はず

(三) 我すでに屢なんぢに云ひ今復これを云はん自ら己を

捐て自ら己を献ぐべしさらば心に多くの平安を享ん  
 我予ふる萬事にかへて萬事を献げて一物も求めず一  
 物も報を望むことなく専ら確く我を信任すべしさら  
 ば汝われを得べし汝の心は自由にして闇冥も汝を蹂  
 躪せざるべし是を以て専ら汝の勤勞汝の祈禱汝の冀  
 望とすべしこれ凡ての私利を脱して全く單にイエス  
 にのみ従ひ己に死して長なへに我に活んが爲なり此  
 に於て凡ての妄想兇亂及び過度の心勞も飛去り度外  
 の恐怖も汝を遊り猥りなる愛も亦滅びん

第三十七章 心の自由を得んために完く自己を捐へき事



第三十八章 外部の事に於て善く自己を治

め危急に當て神にたよるべき事

事

(一) 我子よ汝凡ての場所と行爲及び總て外部の事務に於て汝の内心中にして全く自己の主宰となり萬物を制御して是等の爲に制せられざることを専ら謹み努むべし汝自己の行爲の主長たるべし決して其臣僕隷たることなく寧ろ束縛を免れて神の子たるものゝ産業と其自由に轉入せし眞正の希伯來人のごとくあ

式〇十一  
五三

十四  
式〇

六  
式〇

三十一  
式〇

るべし彼等は現時の事物の上に立て永遠なる事物を考究し左眼を以て浮世の事物を觀右眼を以て天の事物を看たり彼等は世俗の事物に誘はれて之に纏綿することなく反て是らを己の用に供したり其之を爲すや神の制め給ひし所乃ち其創造に於て當然なる命令を凡ての物に與へし大なる工長の定めたまひし法によるなり

(二) 若し汝も自若として凡ての境遇に立ち見聞する所のものを其外客と肉慾の眼を以て量ることなく各般の



事務に於てモーセの如く直に幕屋に入りて主の教訓

二を乞はば、時として神の託宣を聞き現時と未來の多く

の事に關して教を受て還り來らん何となればモーセ

は疑團難問を決するために常に幕屋に退き危急の時

と人の罪惡のために助けを祈禱に假りたればなり此

のどとく汝も心の内室に走り入り最も切に神の恩助

を要むべし

是れヨシエヤとイスラエルの子孫は主の口より教訓

を求めずして輕しくキベオン人の好言を信じ其價偽

イ出埃三  
三〇七

口太六〇

ハ書九〇  
十四

の信仰に惑はされたる爲に彼等に欺かれたるは吾人の讀し所なり

第三十九章 人は事務の條件に於て佛然たる

るべからざる事

一我子よ汝の事業を常に我に托せ時至らば我能く之を

攝理せん我之を完むる時を待てさらば爾の爲に大なる

益あることを知らん

主よわれは最も快く萬事を汝に托すこれ我心勞は

殆ど益なきを以てなり望らくは深く後事を慮らざる

第三十九章 人は事務の條件に於て佛然たるべからざる事 三八三

ハ書九〇  
十四



して欣然自己を汝の聖意に交しまつらんことを

(二)我子よ人は往く或ことを望んで切に辛勞すれども若し之に達するときは之を厭ひ始む何となれば人の愛情は一物に確く永續するものにあらずして甲より乙に推し前じものなり故に假令最微なることにも自己を捐るは少々ならざる利益なり

人の靈魂の真正なる上達は克己に於て存す己に克ちたるものゝ生命は甚だ自由にして安泰なり然れども常に凡ての善事に敵する老仇は絶へて誘惑を熄む時

イ彼前五  
〇八

口提後二  
〇二六

ハ大二六  
〇四一

イ詩八〇  
四

なく若し爲し得べくは護りなき者を倒に騙欺の網に陥んと欲して日夜危くも吾人を埋伏せり故に我主曰はく汝等誘惑に入らざる爲醒め且禱れと

第四十章 人には自ら一事の善なく又驕るべきものなき事

(一)主よ人は如何なるものなれば之を聖意にどめ給ふや又人の子は如何なるものなれば之を顧みたまふや人は何等の功勞ありて恩恵を予へたまふやもし汝われを棄て給ふとも何を以てかこれを憫まん又爾わが欲

第四十章 人には自ら一事の善なく又驕るべきものなき事 三八五



ふ所を爲し給はずとも我當に何を以てか之を訴ふべ  
き乎我の正に思ひ且言ふべき所は實に是なり主よ我  
は虚無にして一事の爲し得ることなし我は自ら一の  
善なく萬事に於て不具なり又我向ふ所は虚無なり爾  
もし我を助け我心に訓へたまはざれば全く冷て頰か  
ざるを得ざるなり

然れども主よ爾は恒に變遷することなくして永遠に  
存らへ常に善なり義なり聖なり且主の爲す所至善至  
義至聖ならざるなし又智慧を以て萬事を定めたまへ

四  
一〇

〇二七  
〇二七

〇二六  
〇二六

〇三  
〇三

二但四〇  
十六二〇

ホ母前一  
〇十八

り然るに進むよりも退くことの早き我は嘗て同一の  
状態に存ざるなり蓋は七つの時は我上を過ぎたれば  
なり然れども爾の聖意に適ふて其助のみ手を延べた  
まふ時は速に良きに更らん何となれば汝は人の助を  
用ひずして單り我を助けて強めたまへばなりこれ我  
顔色再び變らず我心たい爾にのみ向て安息にあら  
しめんが爲なり

是故に虔信の成達のため又人より受くべからざる慰  
を爾に求むる必要の爲に一たび全く人爲の安慰を放



擲することを得ば我は爾の恩恵を望み又新しき慰藉を受けて大に喜ぶに足らん

(二) われ汝に感謝せん何れの時を問はずわが福はみな主

よりいづるなり

然れども我は汝の目には只虚無空物にして不定怯弱の人なりさらば我何を以てか驕らん何の爲にか貴まれんことを欲する虚無なるが爲か否是最も空しきことなり徒らなる虚榮は實に悪疫なり又甚だ大なる虚無なりこれ人をして真正なる榮光より離れしめ天の

○十八

正  
十六  
二

○三  
八  
十四

恩恵を失はしむるなり蓋は人は自ら喜ぶと共に汝を患らし人の稱讃を渴望すると共に誠の徳義をも失へばなり

夫れ人の真正なる榮光と清き喜悅は己を驕らすして

爾を以て驕となし自己の道德を喜びとせずして爾の

聖名を以て悦ばなし爾の爲にあらすんば如何なる受

造物をも其喜とせざることなり

我名は頌へられずして汝の聖名は頌へらるべし我工

は尊まれずして爾の聖工は尊まるべし願くは汝の聖

へ  
○三  
一

二  
○三  
十

三  
○三  
〇



ト詩三〇  
ナ番後十  
二〇五

約五〇  
三四一  
一

名はほめられ我は秋毫も人の稱賛を與へられざらん  
を汝は我驕なり我心の喜悅なり終日汝を以て我  
驕り我喜悅とせんされどに於ては我弱きことの外  
われ自ら驕らず

相互の尊敬を求るは猶太人の爲すに任せ我はた神  
より來る尊敬を求めん實に凡て人間の榮光も凡て俗  
世の名稱も凡て世上の尊貴も汝の永遠なる榮光に比  
まれば漠として愚なればなり最も尊き三位一體の神  
は汝は我眞理我憐恤なり願くは讚美と尊敬と力と榮

光は世々涯りなく獨り爾にあらんことを

第四十一章 凡て俗世の名稱を輕すべし事

一我子よ爾もし他人は貴み隆められ己は輕せられ賤め  
らるゝを見るときも憂ふること勿れ爾心を揚て天に在  
る我を望むべしさらば地上の人の侮は爾の心を痛め  
ざらん

二主よ我等は盲きにあかて虚影の爲に誤られ易し

われ公平を以て我衷を視れば如何なる受造物も我を  
害したることありとはいひ難し故に當然爾の前に訴

ト詩六〇



七但九〇

ぶるを得ず然れども我幾回か深く汝に罪を負ひたれば凡ての受造物の我を攻るは常然なり此故にわれは

(一) 正に恥辱と侮を受くべくして讚美と名譽と榮光は爾に歸すべし

我凡ての受造物に輕斥を受け全き空物となさるゝ爲に欣然快よく自ら備ふるにあらざれば心の平安と定

(二) 固を得がたく又靈に照明を受け十分に爾に結ぶことを得ざるなり

第四十二章 平安は人によりて受くべから

ト正對正

しる事

(一) 我子よ汝もし敬信若くば親密なるが故人によりて汝の平安を得んと欲せば常に不定檢束の状態にあらん然れども若し永遠常在の眞理を以て頼となすときは

一箇の友人の離別又は死亡の爲に悲を受けざるべし汝の友人を親愛することは宜く我を以て基礎とすべし汝世に於て重んじ愛するものは之を我爲に愛すべし我によりざれば友誼も力なく常なし又我によりて結ばれざる愛は實ならず醇ならずざるなり

第四十二章 平安は人によりて受くべからざる事



イ彼前五  
〇五

(二) 汝かゝる愛友の愛情に向て死するものとなり爲し得  
 べくは凡ての人間交際を離るゝことを願ふべし人も  
 し凡て地上の安慰を離るゝこと愈遠ければ神に接  
 すること益近し又ますます己を降して自ら賤ふせ  
 ば則ち高へ揚げられて神の前に至るべし然れども何  
 らの善にても己に歸するものは神の恩恵の來るを碍  
 ぐ何となれば聖靈の恩恵は常に遮れる心を求むれば  
 一なり汝もし全く自ら空しくし凡て受造物の愛を取竭す  
 ことを得ば我は必ず豊かなる恩恵を汝に注ぎ入るべ

〇二十  
研前四

第四十三章

益なき世俗の智識を避くべき事

三九五

し汝の眼受造物に向ふときは創造者は面を背けて汝  
 を見ざるべし創造者を愛する爲に萬事に於て己に克  
 つはとを習ふべしさらば神の智識に達することを得  
 らんも如何ばかり鎖少のものたりとも猥りに之を愛  
 し費めば最高さのものより汝を抑留し汝の魂を腐ら  
 すものなり

第四十三章

益なき世俗の智識を避くべき事

(一) 我子よ假令人の云ふ所麗佳惠敏なりと雖も之に動か



さるゝこと勿れ蓋は神の國は言葉に在るにあらす能  
力にあればなり能く我言ふ所を守れ蓋し是れ心を燃  
し意を照ち七痛悔を催し種々の慰藉を豊かに與ふれ  
ばなり

人に學あり智ありと見られん爲に決して我道を読み  
えどなきむしる汝の罪惡を消滅せんことを勸むべし  
是則ち多くの難き問題を知るよりも汝に益あればな  
り汝多くのことを讀て之を知りたる時には常に一箇  
の本源に歸着すべきなり

我は智識を人に教ふるものなり我は幼童に明智を與  
ふるごと人の師に優れり我に聽く所のものは早く賢  
くなり又靈魂に多くの利益を得べし嗚呼多く人の奇  
事を尋ねて我に仕ふる道を緩にする者は殃なる哉凡  
その師の師諸の天使の君たる基督の現れて諸人の課  
業を驗し乃ち各人の良心を驗査し給ふの時來らん此  
時彼は燈火を以てエルサレムを尋ね闇冥に隠れたる  
ものは露はれ人の舌を論ふことも緘黙せん  
(二)我は一瞬時間に遡りたる心を隆めて庠序十年の勉學



二にも優りたる永遠の真理の學問を曉らしむる者な

り

○五  
二卷四  
十二  
八節一〇

我教は言語の音なく異説の混雜なく名譽の驕なく又  
論駁の争ひなし

我は人を訓へて地上のものを軽んじ目前の物を厭は

しめて天上の物を求め永遠なる物を慕はしめ名譽を

避け加害を忍び凡ての望を我に置き我を離れては一

物も望む所なく萬物に超えて熱烈に我を愛せしむる

なり嘗て一師あり全く我を愛するによりて神のこと

四〇十  
口語八十

四〇七  
四〇七

十四  
六〇

を學び常に感歎すべきことをいへり彼は機敏なるこ  
とを調ふるよりも萬事を棄ることによりて多く益を  
得たり

然れども或ものには己普通のことを語り或者には特  
異のことを語り或者には記號と形象を以て温乎とし

て現はれ又或ものには多くの光明を以て秘奥を示す  
なり書篇の聲は實に一なりと雖も各人に教ふる所は

凡て同じからざるなり蓋しわれは眞理を内心に教ふ  
る者心を糾明するもの思想を鑑定する者言行を推し

五耶十七  
一〇  
一三



進む者また我適宜と認むるに従ふて各人に分賦するものなり

第四十四章 外物に心を留めざる事

(一) 我子よ汝の義務は多くの事に於て愚となり己を地上に死したる者となし又自己の爲に全世界も十字架にかゝりたるものとなるにあり汝また耳を聳して多くの事を通して寧ろ汝の平安に關することを念ふべし汝樂しからざるものより其目を轉じ各人を其想ふ所に任すは争論の奴隷となるよりも更に有益なり若し

神と汝の間相和して汝の心に神の審判を慮れば人に勝たるゝことを忍耐するも容易ならん

(二) 嗚呼主よ吾人は如何なる境遇に至りしや看よ吾人は一時の損失を歎き縋糸の利の爲に刻苦奔走すれども我靈魂的危害は心に忘れて殆ど遂に記憶に復らず有乎無かの利益のことは之を意ふも特に缺く可からざることをば軽く見脱すなり蓋し人全く外物に陥没し而して速に悔ざれば欣々として其中に永寓するに至らん



イ詩六十  
〇十一

ロ詩三七  
〇三九

第四十五章

凡ての人を信用すべからざる  
事及び言語を以て誤り易き事

(一) 主よ患難の時に我を助け給へ蓋は人の助は益なけれ  
ばなり必ず忠誠を得べしと自ら期したるも之を得ざ  
りしこと幾回ぞや又豫め期せざりし所に之を得た  
りしこと幾回ぞ是故に神よ人を頼とすることは徒ら  
(二) にして義者の救は爾にあるなり主よわが神よ我にか  
よる萬ての事に於て爾を頌ふべし  
我等は脆弱にして定りなく喘かれ易く又變り易し孰

ハ詩三七  
〇二四

れが萬事に於て自ら守ること細心謹密にして能く欺  
騙昏迷に陥らざる者ぞや主よ汝を頼となし一心を以  
て爾を求る者は容易に僵れざるなり彼も患苦に陥  
り未曾有の紛擾を受るとも速に汝によりて濟はれ或  
は汝の慰藉を得ん終まで爾を頼とする者は汝之を捐  
て給はざるなり  
友人の爲に其百難を徹して能く忠實を換へざるの朋  
は得がたし主よ汝のみ恒に忠實にして汝に等しきも  
のあることなし

第四十五章 人を信すべからざる事言語を以て誤り易き事 四〇三



(一) 我心意は卒然基督によりて建てりといひし其聖き

魂の賢きこと如何ばかりぞや

譯者註す此語は紀元二百五十一年デシヤス帝治世

の時迫害を受けてカタナに殉教の死を遂げしシリ

島の島の人なる聖アガタのいひし所なり島の太守キ

ンシテアサス一狡漢使賅してアガタの徳操を破り

其信仰を汚さしめんと百方之を勸誘したる時アガ

タ斷然之を斥けて曰く「我心は卒然基督に基て立

て汝の言は風なり汝の契約は雨なり汝の怒威は

〇二四  
二五

六〇十一  
二五

洪水なりよしや烈しく我屋の基を撞つとも我屋は

決して倒るることなし何となれば是堅巖の上に建

たればなり」と

我また斯の如くあらんには人の恐怖も我を苦めがた

く言の鎗も我を盪かさざるべし

孰か萬事を前見することを得ん孰か豫め未來の禍害

を防ぎことを得ん若し夫れ吾人は豫め見たることの

爲にも往々害を受くれば争でか意外の事の爲に深く

害せられざらんや我の如き究者にして何故に能く自



準備入ざりしや又何の爲に輕々しく他人を信用せし  
や然れども吾人は人なり假令吾人を呼んで天使となす  
もの多しと雖も必竟吾人は脆弱なる人に對ならず  
主よわれ孰をか信用せん身を措て更に信するものな  
し爾時人を欺かず又人にも欺かれざる所の眞理なり  
而して一方を見よ凡ての人は嘘なり弱なり定りなく  
して曠易し殊に言語に於て失墜易き者なり是故  
に外にそは初め義しく聞ゆるも倉急信用を置くべき  
にあらざるなり

人を慎むべしと汝の戒めたまひしことは如何ばかり  
智さや主又曰く人の仇敵は其家の者なれば此所を見  
よ彼所を見よといふとも之を信する勿れと  
我受し善は是我師なり冀くは之によりて我謹を  
増し我愚の増さいらんことを人ありていふ謹慎して  
我いふ所を人に漏す勿れ」と我乃ち緘黙してこれ秘  
密なると思ふ間に其人は我に秘めよと望みしことを  
自ら包むこと能はずして忽ち我と自己とを賣りて而  
して去るものあり



〇二三  
一六二四  
三六  
六二  
計二四  
九  
四〇  
十四

主も願くは斯る輕躁なる言を出す人より我を護り彼等の手中に陥れず又自らかゝる事を行はしめ給ふ勿れ願くは眞實定確なる言語を我口に入れ巧詭の舌を我より遠け給へ他人より受るを欲せざることに我また力を盡して自ら爲すを避くべきなり

(三) 臆他人に就て喋々せず凡ての人言を輕信せず又わが聞しことを直に人に告す多くの人に内事を明さずして常に心に看たまふ爾を求め凡ての言語の風の爲に吹き廻されずして心の内外のこと皆汝の聖意に従ふ

十  
七〇  
七〇

成就らん足とを欲するは如何ばかり善くして平安に屬するべきをやはり

外容を避け又外部の賞賛を率くが如きことを求めずして専ら力を盡して生命の革新と熱烈なる虔信を生ずることとを求るは天の恩恵を保つ爲に如何ばかり安んぜんなる哉其徳を人に知られ輕倉なる稱賛の爲に害せざれられたる者何ぞ其多きや試誘と争闘の多き此死すべき世に於ては沈黙によりて恩恵を保持するの益いかにばかり多きや

第四十五章 人を信すべからざる事言語を以て誤り易き事 四〇九



第四十六章 誹謗の興る時は神を頼とすべ

事

(一) 我乎よ毅然として立ち我を頼とせよ人の言語は何ぞ  
 や唯言語のみ是れ空中を飛べども石をも害すること  
 なし汝罪あらば其言によりて甘んじて自ら改むるこ  
 とを務めよもし良心の責なくんば神の爲に欣然甘ん  
 じて之を忍ばんと決心せよ爾いまだ烈しき鞭撻に耐  
 むるの勇氣あらざれば時ありて數個の言語の爲に苦  
 むどもこれ甚だ世事なり

然るに何の故に汝の心は斯る些事の爲に痛むるかこ  
 れ爾は肉に屬し分に超えて人を重んずる爲ならず  
 や何ぞなれば汝人に輕せらるゝことを恐るゝが爲に  
 汝の罪過を批難さるゝを好まずして遁辭の庇蔭を求  
 むればなり自ら衷を顧るべしさらば世は尙汝の中に  
 活て人を悦ばさんとする空氣の存するを認めん爾其  
 罪過のために非難貶黜を受けるを厭ふはこれ謙遜實な  
 らず汝の世に死せること誠ならず世も亦汝の爲に十  
 字架に釘けられざりしや瞭かなり

第四十六章 誹謗の興る時は神を頼とすべ事 四一一







二箴十二  
〇三十一

三正  
八潔二〇

水詩七〇

九默二〇二

三母前十

六〇七  
二約七〇

是故に人は自己の意見に倚らずして凡ての判断に於て我に基くべきなり如何となれば神より如何なること來るとも義者は亂さるることなく如何なる不正の罪名を着せらるることなく深く意とせず又假令他人より正當なる辯護を得ることも之が爲に過度なる感激を起すことなかるべし彼曰らく我は心と腎を探るものにして外面により或は人の容貌によりて判定を下さずと論じ人の判定にては賛むべしと思ふ事も我目にて

十詩七〇

三〇二  
〇四  
〇四

(一) 是或時責むべきものなることあればなり  
 (二) 強くして忍びたまふ正義の審判者主なる神よ爾は人の脆きことと罪あることを知り給へり願くは我力又汝が凡ての頼憑となり給へ蓋は我良心我に満足らざればなり  
 汝はわが知らざる所を知り給へり故にわれは凡ての責を受くるも自ら遜り柔順に之に耐ゆべきなり若し我行ひこれに反する時は常に汝の憐恤によりて我を恕し次回試惑の來ること更に大なる忍耐を我に予







○十  
ハ羅七五  
○一  
ハ羅八〇  
十八

二五十四  
〇七

ホ羅七〇  
二四  
ハ詩百廿  
〇五  
ト兼二五  
〇八

さらばわれ汝の報酬たらん書けよ讀めよ誦へよ悲歎  
せよ黙せよ祈れよ又壯ましく難に耐へよ涯りなき生  
命を得んには斯ることあるも否更に大なる戦闘に逢  
ふも豈厭ふべけんや主の知りたまふ一日來らん時平  
安あるべむ其日には晝もあらず夜もあらずして只永  
遠の光明無限の赫耀定固なる平安及び穩乎たる安息  
のみあり汝此時に至ては「此死の體より我を救はん  
ものは誰ぞや」といふことなく又「歿なるかな我宿り  
は長」と叫ばざるべし何となれば死は倒さまに投

チ來十一  
〇二五  
二六

下せられ破れざるの拯救あかて再び心を痛ましむる  
ことなく但「福なる欣喜と樂しく愛らば」交遊ある  
のみ  
(二) 臆怖もして天に在る聖徒の永遠の寶冠を見まはる日に  
は此世に侮られ生命を保つにも足らざるものと思意  
されし彼等は今如何ばかり大なる榮光を以て悦ぶる  
かを見たらんには汝は直に自ら卑ふし首を垂れて地  
に伏し一人の上には主長たらずして寧ろ萬人の管下  
に在らんことを欲するなるべし又此世の樂しみを求



めずして却て神の爲に患苦を嘗むるを悦び衆人の間に  
 虚無と目せらるゝを最大なる利得と爲さん汝もし  
 是等のことを嗜み是等を汝の心底に沈澱せしめしな  
 らば争で一回の怨訴をも敢て爲すことあらんや凡て  
 の苦役は涯りなき生命の爲に忍ぶべきにあらずや神  
 (一)の國を得ると失ふとは是小事にあらざるなり  
 是故に汝の顔をあげて天を仰ぎ我とわれと共にある  
 凡ての聖徒を看よ彼等はこの世に於て大に戦ひたれ  
 ども今は悦び今は慰められ今は安全にして憩息にあ

り而して我父の國に於て長なへに我と共に止まら  
 ん

第四十八章 永遠の世と此世の窘迫なる事

(一) 福なる哉天に在る市府の居嗚呼清朗なる哉永遠の  
 日夜之を闔くすることなく最高き真理常に之を照す  
 なり此日は常に悦ばしく常に安全にして此反對の變  
 轉なきなり嗚呼願くは一たび其日の來て凡て是等の  
 俗事の終らんことを是日や聖徒に向ては無限に赫く  
 光を以て照り地の旅客に對しては唯杳乎として恰も



口番前十  
三〇十二

ハ創四七  
〇九

〇二  
ト燃二二

鏡を以て見るが如し天の市民は彼の日の如何ばかり  
 樂むさかを知れども竄流せられたる子等は此  
 日の慘世無聊を歎ずるなり  
 此世の目は短く凶くして惆悵窘迫を以て充ちたり人  
 は此所に於て多くの罪に汚され多くの情慾に誘われ  
 多くの恐怖に阻まれ多くの心勞に責められ多くの好  
 奇心に溢され多くの虚榮にまつはられ多くの誤に圍  
 まれ多くの苦役に傷られ試誘に壓せられ快樂の爲に  
 氣力を殺かれ究乏の爲に苦じめらるる人な故に土に

第四十八章 永遠の世と此世の窘迫なる事 四二二

ニ羅七〇  
二四

ホ詩七一  
〇十六

〇三四  
ハ六

何れの時は是等の過害は終らん我は何れの時か我罪  
 の惨まじき奴隷たることより救はれん主よ我は何れ  
 の時か單り汝をのみ意はん我は何れの時か汝を以て  
 十分なる悦とせん我は何れの時か心身の凡そ煩ひ  
 なく凡て如何なる障碍もなくして真正の自由を享ん  
 我は何れの時か鞏固なる平安靜定なる平安心の内外  
 の平安また八面牢乎たる平安を得ん憐み深きイエス  
 よ我立て汝を見るは何れの時か我爾の聖國の榮光を  
 望見るは何れの時かまた爾を以て萬福全歸の至極と

第四十八章 永遠の世と此世の窘迫なる事 四二二



なすは何れの時ぞや汝が愛する者の爲に永遠より備へたまひし聖國にて我爾とよもにあらんは何の時ぞ

我は日ごとに戦闘と甚だ巨なる禍殃ある我仇讐の國に於て無力廢竄のものとして残り

(二)我流竄を慰め我悲みを和らげ給へ是れわが望み全く主を慕ひ又慰藉として此世の予ふるものは皆われに苛煩なればなり

我は心に最も深く爾を享んとすれども是を遂ぐるこ

と能はず我全く天の事物に交付されんことを望めども世俗の事物と制しがたき情慾とは我を壓へ心にては萬事に駕せんと欲すれども肉の爲には心ならずも彼等に伏せられざるを得ず斯の如く我は福なき人なり己と戦ひ己を悲み靈は上ならんと欲して肉は下ならんと欲す嗚呼我心意に天の事物を意ひ禱らんとするに乗じて數へがたき肉の念ひは忽ち我心に浮ぶ此時わが苦みは如何ばかりぞ  
嗚呼わが神よ我に遠かり給ふなかれ怒を以て爾の僕



我を棄て給ふこと勿れ爾の電光を打出して彼等を散ら  
 悲爾の箭を發て敵の念を迷はしめ給へ我感覺を集て  
 爾に復らしめ我をして凡ての俗事を恐れしめ傲然速  
 かに凡ての邪念を捐ることを得しめたまへ永遠の眞  
 理なる王上願くは我を助け虚榮の爲に心動かさるよ  
 ことなからしめ給へ天の甘美なる王よ我に來り凡て  
 の不潔をして爾の面前より遁れしめ給へ  
 又我祈るとき汝の外なる事物を思ふことは我を想し  
 憐を以て我を寛待したまへ

我は多くの擾亂を受やすきことを實に懺悔せざるべ  
 からず我身軀の起座せる所にわれはあらまして却て  
 わが思想の我を選せる所にあること實に屢ばなれば  
 なり我思想のある所は則ち我在る所なり而して概ね  
 我愛情のある所に我思想もまたあるなり自ら樂しき  
 こと或は習より喜ぶことは實に我に興り易し之に就  
 て眞理なる主は昭かにいひたまはく「汝の財貨のあ  
 る所には汝の心も亦あり」と我もし天を愛せば好て  
 天の事物を推究すべし若し世を愛せば其福利を悦び



其禍害を悲むべし若し肉を愛せば肉に屬するものを  
 思ひ若し靈を愛せば喜んで靈の事を念はん如何なる  
 ものにても我愛する所のものは好んで之を口に之  
 を耳にし其模形を携へ歸らん  
 然れども主よ爾の爲に喜んで凡ての受造物と別れ且  
 静和なる良心を以て汝に粹き祈禱を献げ地上のもの  
 は内外ともに凡て之を杜絶して歌謠ふ天使の群に入  
 れらるゝに足らんが爲に其天性を壓虐し靈の勢威を  
 以て肉慾を十字架に釘る人は福なり

ヨハネ八〇  
十三

二二〇

第四十九章 永生の願望および健闘する者  
 には大なる報酬の約束ある事

(一) 我子よ汝もし永遠の幸福を熱望するの心天より汝に  
 興へられ回角の影することなく明瞭に我光輝を見ん  
 が爲に此身軀の幕屋を脱せんと欲せば汝の心を宏開  
 し汝の冀望を竭して此聖き感化を享くべし汝至善の  
 主に對して最大なる感謝を爲すべしこれ此如寛讓  
 を以て汝を遇し憐恤を以て汝に臨み熱烈に汝を鼓舞  
 し勁く汝を保持し自己の重きによりて地上の事物に

イ雅一〇  
十七  
口約十七  
〇廿四  
ハ彼後一  
〇十三

第四十九章 永生の願望と健闘する者には報酬の約束ある事 四二九



○十三  
○十四  
○十五  
○十六  
○十七  
○十八  
○十九  
○二十

墮落することなからしめ給へばなり汝の之を得るは  
自己の思想若くは怒力によるにあらざりて唯天の恩  
恵と神の愛護の寛讓によるに外ならざるなり是汝が  
凡ての徳義の進歩を増し大なる謙遜を得未然の闘争  
に對して自ら備へ汝の心の愛情を盡して我に拘着し  
熾なる欣諾を以て我に事へんが爲なり  
(二)我手と火は屢ば然れども煙なくして火爐の上るごと  
なきが如く或人の冀望は天の事物に對してもゆれど  
も又肉慾の試惑なきと能はず此故に彼らが神に向

三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

て熱願なすとも醇然全く神の尊榮を求るにあらま  
沈眞至誠を装ひし汝の希望も亦往々是は同じ汝自己  
の格段なる利害得失を混合したる所の希望は清く全  
かもざるなり汝の爲に快樂有利なる事を願はずして  
我意に適ひ我尊榮に歸することを願へもし汝の判断  
正しくば汝自己の冀望若くは他の望まじきものにも  
従はずして我所定を向とみ之に隨従すべし  
我は汝の冀望を知り屢ば汝の苦吟を聞けり汝は今神  
の榮光ある自由を享んと欲す汝は今永遠なる栖處則







用なき者とせられん斯ることは時として肉昧の患難  
なり黙して之に耐ゆるはこれ大事なり主の忠僕は是  
等或は是等に類する多くのことに於て試みられ凡て  
の事に當て其自ら克ち自ら馴らすの如何を見らるべ  
きなり

己に死すべきことは常に汝の責務なり況て汝の意に  
反することを見また之を身に受るとき殊に不便無用  
なりと思ふことを命令せらるゝ時に於てをや而して  
汝他の權威の下にありて肯て上位の人に抵抗せざる

○六  
大綱第十  
二四  
○  
○  
○

が故に他人の指揮に従ひまた凡て自己の意見を捨て  
ざるべからずと感ずること困難なるなり  
然れども我子よ此苦役の結果と接近したる終の日と  
極て大なる報酬を想ふべしさらば之を忍ぶに愁訴  
することなくして反て其忍耐より最勁なる慰藉を得  
ん如何となれば今汝が直に棄る其僅なる汝の意志の  
代とし大常に天に於て汝の意志を得べし然り天に於  
ては凡て汝の願ふ所凡て汝が望み得る所のものを得  
凡ての善事汝の手邊に在りて之を失ふの恐なからん



彼所にて汝の意志常に我と同一にして何等の外物私  
 事をも嗜まざらん彼所にて汝に敵するものなく汝を  
 謙くの人なく汝を妨ぐるもの又汝を障ふるものなか  
 らん汝の望む萬物共に備りて汝の愛情も全く慰養し  
 之をして端邊まで充たしめん汝の世に於て受けたる  
 嘲罵に對して我彼所にて榮光を與へ患難に對して讚  
 美の衣を與へ最賤なる地位に對して涯りなき玉の位  
 を與へん彼所にて從順の實は結ばれ懺悔の苦役は  
 喜となり邁りたる服従に尊き冠冕を着せられん

さらば目下は凡ての人の下に邁りて自ら屈し何人の  
 この事を云ひかの事を命ずることも意とすること勿れ  
 殊に注意すべきは汝の長者或は劣者或は同班なるか  
 の汝に或事を求め若くは暗に其希望を示すとも凡て  
 快く之を承け努めて誠意を以て之を成し遂ぐべし  
 甲は之を求め乙は彼を求め丙は此を驕り丁は彼を驕  
 り千たび萬たび人に讚らるゝも汝は彼是を悦ばず唯  
 自らを輕んじ我聖意と尊榮を求むることのみを悦ぶ  
 べし假令生命を以てするも死を以てするも神は常に



汝に由りて辱まれんことは汝が望むべき所なり

第五十章 孤独なる人は己を神の手に托ぬ

へき事

(一) 主なる神いと聖き父よ今も何時までも爾は願むべき哉これ汝の欲ひ給ふが如く其事就る汝の爲したまふことは善なり汝の僕をして自己若くは他の如何なるものをも喜ぶせしめて汝を以て喜悅となさしめ給へ蓋は主よ爾のみ真正の喜樂にして汝はわが望み我冠我喜悅我名譽なればなり汝の僕の持てる物は汝

〇七 哥前四

より賜りたる物の外何かあらん是さへ其功勞のある爲にはあらず爾の賜ひしもの又汝の造りたまひし物皆汝の有なり

〇十五 詩八八

(一) 我は貧しくして幼きより患難の裡にあり時ありて我魂は悲みて涙をさへ流すに至る又時ありては我上に懸る艱苦の爲に心自ら濫るゝなり我は平安の悦を渴望す爾の慰藉の光明に於て養はるゝ爾の子等の平安を切望す汝らし平安を與へ我心に聖き悦を灌ぎ給はば汝の僕の魂は樂しき音樂に充され熱愛を以て

第五十章 孤独なる人は己を神の手に托ぬべき事 四三九



ヨ詩百十  
九〇三二  
タ伯二九  
〇二三  
レ詩十七  
〇八

〇十正  
カ龍八八

汝を讚め頌へん然れども爾の數次爲したまふ如く自  
ら退去し給はば彼は汝の聖誠の道を走ること能はず  
却て其膝を屈し其胸を打たん如何となれば今は汝の  
燭火其頭上に輝き汝の翅の下に於て襲ふ試誘より護  
られし昔時と異なればなり

(二) 正義の父よ汝は常に讚美すべき哉爾の僕の試みらる  
べき時期は來れり愛する父よ今にして汝の僕が汝の  
爲に多少の苦を嘗むべきことは正當なり永遠に尊敬  
すべき父よ汝が其來るべきことを豫め永遠より知り

〇三三  
レ詩十一

〇六  
レ詩六

〇六  
レ詩六

給ひし時期は來れりこれ汝の僕が暫く外部の抑壓を  
受け而かも衷心にては常に汝と共に栖むべきが爲な  
ゆ今は乃ち須臾く軽く低くなされ人の目に哀へ艱難  
と困憊の爲に據らるゝの期なりこれ新しき光明の朝  
暁に於て汝と共に再び起ち天に於て榮んが爲なり  
聖さ父よ汝は斯く定め斯く欲ひたまへり汝の命じた  
まひしそのごとく成れり何となれば汝の友爾を愛す  
るによりて聖許したまふ度毎に定めたまふ人々の手  
より此世に於て患難を愛るは汝の友に對する恩顧な







○九  
○十四  
○十四

實謙遜なる僕とならしめ凡て汝の指揮に従はせ給へ  
我は自己と我物を悉く汝に捧げて矯正を願はん此世  
に於て罰せらるゝは後の世に於て罰せらるゝに勝れ  
り  
汝は詳細に凡ての事を知り給へり人の心にあるもの  
一として汝に隠るゝことなし事の成らざるに先立て  
汝其興るべきことを知り又師教を受ること若くは地  
上に行はるゝ事物の告知を受けるの要なし汝はわが靈  
魂の進歩に宜しきことゝ我罪の鏽を落すに如何ばか

○三  
○三十一

の患難の適するかを知りたまへり願くは爾の聖意の  
まゝに我を待遇ひ給へこれ我希望なり我罪ふかき生  
命を輕んじ給ふ勿れ是汝の外之を明細に知るものな  
し  
主よ願くは我をして知るべき所を知り愛すべき所を  
愛し汝の最も喜みし給ふ所を讚め汝の貴み給ふ所を  
高く貴み汝の目に汚穢となし給ふ所を忌ましめ給  
へ  
願くは我をして肉眼の視る所によりて裁斷せず無識



なる人の耳に聴く所によりて宣告せずして確實なる  
 裁斷を以て有形のものゝ靈に屬するものとを區別し  
 萬事に起つて常に汝の聖意の向ふ所を探しめたまへ  
 人の心意の裁斷はしばしば誤り世を愛するものも亦  
 唯有形の物を愛するよりして誤るなり人は人より尊  
 敬せられたる爲め嘗て何の更ることかあらん 欺者  
 欺者に諛ひ虚しき人虚しき人を讚め盲者盲者を稱  
 し怯者怯者を頌へて之を誤らしむるなり而して彼徒  
 らに人を讚むると同時に却て恥辱を蒙らすなり謙遜

なる聖フランシス曰く「凡ての人の實況は汝の前に  
 視らるゝ如し其他更にあることなし

譯者註す聖フランシスは有名なるフランシス派の  
 始祖にして千百八十四年ウムブリヤのアッシンに産  
 れたる人なりポナヴエンチユラ其傳を叙したる中  
 に左の文あり

聖フランシスは基督の徒弟として努めて自己と  
 他人の前に賤しき者とならんとせり是れ吾人の  
 大なる師が「夫れ人の崇ぶ所のものは神の前に



悪まるいものなり(路加傳十六章十五節)と曰  
 ひ給ひしことを記憶してなり「凡ての人は神の  
 前まへに視ゆる所ところこれ其人そのひとにして更さらに其他そのほかありず  
 言ことばを常つねに口くちにしたる而已のみならず世よの稱譽しょうよの爲ため  
 是こゝに昂あがりげらるるを愚おろかなることとなして非難ひなんを受うる  
 誠まことを喜び稱讚しょうさんを受うるを悲かなみたり

第五十一章 高尚なる勤勞を執るに力足ら

ざる時は自ら卑下なる事業に

當るべき事

十八  
 〇〇八〇  
 式〇三二  
 十百十

- (一) 我子わがこは汝なんぢは常に徳義とくぎを熱望ねつぼうし又また天てんに向むかひ高尚かうしやうの黙想もくそうを持もつこと能あたはず却かへりて汝なんぢの意志いしに反はんし嫌厭けんえんなるにも拘かはらず往わうく元質げんしつなる腐敗ふはいの爲ために劣等れつとうの事物じぶつに下くだり此腐このくさるべき生命せいめいの重荷おおいを負おはざるを得えず汝死なんぢしすべき體軀からだを提たげたる間あひだは心こゝろに煩悶はんもんを感かんずべきが故ゆゑに肉にくに絶たえず靈れいの修練しうれんと聖きよき推考すいかうに當あたること能あたはざればなり
- (二) きらば汝なんぢの爲ために宜よろしきは趨はしりて賤いやしき外部ぐわいぶの事業じげふに就つき

第五十一章 高尚なる勤に力足されば卑下の事に當るべき事 四四九



イ詩百十  
九〇三二  
口羅八〇  
十八

(一) 二き良き動作を以て自ら慰め確信を以て我降臨と天の慰問を待ち望みわれ再び汝に臨み汝を凡ての愛患より放つ時まで忍んで其流竄と心意の早燥なるに耐ゆることなり蓋し我なんぢをして勞苦を忘れしめ又心に靜和を享けしむればなり我は聖經の美しき郊野を汝の前に擴め汝の心を潤くし我誠の道を走り始めしめん此に於て汝曰はん「今の時の苦はわれらに顯れんとする後の榮光に比すべきにあらず」と

一五二 第五十二章 人は自ら安慰を受るに足らず

二三  
ハ詩六〇

二三  
ハ詩六〇  
ハ詩六〇

反て懲戒を受くべきものと思ふべき事

(一) 主よわれは爾の責臨慰藉もしくは靈の慰問をも受るに足らず汝われを無力孤寂に棄てたまふ時はこれ當然なる處置なり何となれば假令我洋なす涙を流すとも尚汝の慰藉を得べきにあらざればなり我は屢多く汝に罪を犯し諸事に於て深く悪しきを爲したれば受べき所は唯鞭撻と刑罰とのみ此故に萬事を正察せば我は最微なる慰藉をも享べきにあらざるなり

第五十二章 人は慰を受けず反て懲戒を受くと思ふべき事 四五一



イ彼後三  
〇九  
口羅九〇  
三三

ハ伯九〇  
三三

第五十二 四五二

然れども恩恵に富み憐み深き神よ爾は聖工の亡ぶる  
 を好みたまはざれば憐恤の容器に汝の善慈の豊かな  
 るを示さんか爲に汝の僕の功績に過るども人の方略  
 にてきて彼を慰め給へりこれ爾の慰藉は人の慰藉の  
 如きにあらずればなり  
 主よわれに何等の功勞ありて汝は天の慰藉を與へた  
 一 主よ我は何等の善をも爲したるを覺せず唯記する  
 所は常に罪に傾きて悔むるに遅々たることなり此は  
 事實にして拒み難し若しわが云ふ所之に反せば爾は

我に抗つて立ちたまひ我を庇護するものあることな  
 し我罪のために受へべきもの地獄と想へざる火の外  
 は何かあらん我は所有凌侮と輕蔑をうくべきものに  
 して敬虔なる汝の臣僕と共に算へらるべきにあらず  
 ぶことを誠實に自白す我之を聞くを欲せざれども眞  
 實なるが故に自己に對して我罪を暴白し斯くして汝  
 の憐恤を得るに足ることを務めん己罪あり又凡ての  
 混濫に充るに何をかいはんや我口に發する語は唯是  
 のみ曰く「主よわれ罪を犯せり罪を犯せり我を憫み

第五十二章 人は慰を受けず反て懲戒を受くと思ふべき事 四五三

廿  
三  
〇



て赦したまへわれ死の陰に蔽はれたる暗黒の國に入  
るに先立て須臾く我をして我悲哀を嘆かしめたま  
へしと

(二) 罪ありて憐れなる刑人は汝の望みたまふ所は如何其  
痛悔すること并に其罪に對して遜るに若くものあら  
んや恩赦を得るの望は眞正なる痛悔と心の謙遜より  
生ずるなり憂ひたる良心は神と和らぎ曾て失ひし神  
の恩寵をも回復し人は來らんとする義怒より濟はれ  
而して神を罪も悔める魂とは聖き接吻と抱懷を以て

相會するなり主よ遜りて罪を悔む心は汝の饗は給ふ  
祭物にして其香芬乳香よりも優りて汝の前に馨し是  
亦汝の聖き足に漑がるゝを望みたまふ佳膏なり蓋は  
汝は何時も悔み謙る心を輕しめ給はざればなり仇敵  
の患れる顔を避くる所は愛なり如何なる所にて受た  
る如何なる汚辱玷塵と雖も濯ひ改ためらるゝ所は愛  
なり

第五十三章 神の恩恵は地上の事物を嗜む  
者とは相容れざる事



(一) 我子よ我恩恵は貴くして外物又は地の慰藉と共に混へらるるを肯せざるが故に汝もし恩恵を注入せられんと欲せば凡て之を妨ぐるもの棄てざるべからず

宜しく自己の爲に秘かなる所を撰み獨居を愛し人と對話することを願はず寧ろ敬虔なる祈禱を神に捧ぐべしこれ汝の心意に痛悔を保ち又良心の醇潔を保んが爲なり全世界をも空物と見做し凡ての外物を退け神に臣事することを好むべし蓋は汝浮薄なるもの

○十廿一  
ハ正一  
三十八  
※廿八  
○

○十廿一  
ハ正一  
三十八  
※廿八  
○

(二) を樂むと同時に我に事ふること能はさればなり汝の知込朋友に別れ汝の心意を凡て俗世の慰藉より除くべし是れ聖ペテラの「基督に忠實なる者は此世に於て自ら賓旅または寄寓者の如くなすべし」とを乞へる所なり

地上の如何なる物をも愛せずして此世に心殘らざる者は其死期に有する安信のいかに深きを然れども心に萬物を去るは心の瘦弱なるもの尙饒る所にあらず又靈に屬する人の自由も肉に屬する者の知る



所ところにあらざるなり人ひともし實じつに靈れいに屬ぞくするものとならんを欲ほつせば遠とほきものも近ぢかき者ものをも棄すて人ひとを危あやふむが如ごとく別わかれて自みづから恐おそれざるべからず

汝なんぢもし全まづく己おのれに克かたば凡もろて他たのものものを服ふく従じゆうせしむること甚はなだ容たやす易やすからん全ぜん勝しやうとは則すなはち自おのれ己おのれに克かつことな

か何いかんとなれば自おのれ己おのれを判はん服ふくし而しかうして其その肉にく慾よくは理り性せいに服ふくし其その理り性せいは萬ばん事じに於おいて我われに服ふくせしむるものこと實じつに克こく己おのれ者しやにして世せ界かいの君くん主しゆなればなり

(二)汝なんぢもし此この高かう德とくに昇のぼらんと欲ほつせば壯いさましく出し立たちて鉞おの

を根こん底ていに加くはへざるべからずされ其その自おのれ己おのれを愛あいする隱いん然ぜんたる曲く癖せと凡もろて私し利り俗ぞく慾よくを愛あいする念ねんとを援ゆき泯ほうさんさんが爲なり

斯かる吾ご人じんの過くわ度どなる自じ愛あいの罪つみによらざるもの殆ほとんど希まれなり故ゆゑに全まづく己おのれ己おのれにうら勝かたざるべからず若もし一ひとたび之これを打た破はして服ふく従じゆうせしむるとさは直たに大おほなる平へい安あんと靜せい和わを生しんぜん然しかるに全まづく己おのれ己おのれに死し完まづく自おのれ己おのれを脱だつするもの少せうく多たくは自おのれ己おのれに絆はたされ聖せい靈れいによりて自おのれ己おのれの上うへに揚あげらるゝこと能あたはざるなり



五〇四三〇

自由にわれと共に歩まんと欲する者は凡て其腐れ溢れたる情慾を滅じ又特殊の愛を傾けて切に如何なる受造物にも纏綿せざることを甚緊要なり

第五十四章 私愛と聖愛の行動相異なる事

(一) 我子よ謹んで私愛と聖愛の活動を鑑よ其働くこと甚矛盾精微にして靈と心を照されたるものにはあらざれば殆ど見分け難し人は實に善なるものを欲して其言行に於て多少の善を装はざるはなし是に由て善の化粧の爲に欺かるもの多し

一〇三〇

一〇三二  
一〇三三  
一〇三四

一〇三三  
一〇三四

(二) 私愛は巧滑にして衆人を誘ひ之を欺き陥て常に自己の目的志望の爲に謀れども聖愛は行くに純正を以てし凡て凶邪の裝飾を避け欺騙を以て被覆とせず單に神の爲に萬事を行ひ又神を以て終局の安息となすなり

私愛は死すること歴せらるること臣服すること又自ら下に居ることを嫌忌すれども聖愛は勉めて自ら情慾を節し肉慾に抗拒し臣服することを求め他に服従することを冀ひ又自己の自由を振はんことを願はず

第五十四章 私愛と聖愛の行動相異なる事



懲戒の下にあらんことを愛し何人を管理するをも欲せずして常に神の管理の下に存栖せんこと、神の爲には直に凡ての人に屈服せんことを冀ふなり。私愛は私利の爲に争ひ他人より何等の利を効り得るかを思へども聖愛は自己の爲に便利なることを思はずして反て衆人の益となることを思ふ。私愛は欣々として名譽と尊榮を領くれども聖愛は凡ての尊敬と榮光を忠實に神に歸するものなり。私愛は恥辱と蔑如を恐るれども聖愛はイエスの聖名

の爲に誹謗を受るを悦ぶ。私愛は間暇と身體の憩息を愛すれども聖愛は息むこと能はずして欣然労働に就くなり。私愛は珍奇麗佳の物を求めて安價廉惡のものを厭へども聖愛は素樸賤鄙なる者を喜び麤野なる物をも輕せず舊くして補孔せしものをも身に着るを憚らざるなり。私愛は世俗のものを向み肉界の利得を喜び損失を悲しむ些細なる毀言を聞くも之に激することあり然れ



ホ太六〇  
二十

とも聖愛は永遠の事物に着目し世俗のことは纏綿せ  
ず損失の爲に溢されず悪言の爲に心を痛めらるる事  
となし何となれば一物も亡ぶることなき天に於て其  
財貨と喜悅を置きければなり  
私愛は貪慾にして與ふるよりも領るを好み私有のもの  
のにあらんことを愛すれども聖愛は懇切にして人ど  
りを共にし私利を避け少個を以て足れりとなし領る  
よりも與ふるを以て更は祥なりと断定す  
私愛は受造物と自己の肉慾と虚榮と虚談とに傾く之

へ徒二十  
〇三五

四四  
イ太五〇

に反して聖愛は神に近き諸の徳義を追ひ求め受造  
物をすて世を避け肉慾を憎み漫遊を謹み公然人に見  
らるるを耻づ  
私愛は五官を樂しましむる外部の慰樂を持んことを  
好みとも聖愛は慰藉を神にのみ求め凡て有形のもの  
を軽んじ至高なる善を以て快樂と爲んと欲す  
私愛は萬事を行ふに自己の利徳に趨りて無報酬に何  
事をも爲すこと能はず他人に與ふる凡ての懇切に對  
して是と等しきもの或は夫より宜しきもの若くはせ



めて賞賛或は好意なりとも得んと欲して其功業と贈  
遺の深く尚まれんことを希ふや甚切なり聖愛は之  
に反して俗物を求むることなく唯神の外何等の報酬  
をも望まず永遠の事物を得るの用に供する外は俗世  
の必需品をも求めざるなり  
私愛は知己篤班の多きを喜び門閥血統に驕り強者に  
親み富者に諂ひ自己に似たるものあれば是を稱揚す  
れども聖愛は其仇敵をも愛して知己の多きを以て驕  
らず貴き血統と雖も若し更に高き徳なき時は之を意

ト大五〇  
四四

チ哥前十  
三〇六  
リ同上十  
二〇三一

とすることなく富者よりも貧者に厚くし強者よりも  
寡なき者を憫み欺者を喜ばずして正直なるものを  
喜び常に善人を勧めて至良の恩賜を營めじめ又凡て  
の徳によりて神の子に似たるものとならしむるな  
り  
私愛は直に究乏と困難を訴ふれども聖愛は堅志によ  
りて缺乏を忍ぶなり  
私愛は萬物を自己に歸し自己の爲に刻苦爭論すれど  
も聖愛は萬物を其始原なる神に歸し一善をも自己に



歸することなく、倨傲を張ることなく、人と争はず他人の説を斥けて自意を採ることなく、物を知り意見を計るは凡て永遠の智慧と神の審断とに従ふなり

私愛は争ふて秘蔭を知り奇聞を聴かんと欲し、屋外に出るを好み自己の才智によりて多くの事を試み、又人には知られ人の賛歎を受くべきことを爲んと願へども、聖愛は之に反して奇聞をさへ奇事を瞭解するを欲せざるなり、何となれば是全く人の陳さ、腐性より生じたるものにして、地上の物一として新奇華麗なるものな

三〇三二  
三〇三三  
三〇三六  
三〇三七

きを知るが故なり、是故に聖愛は人を教へて知覺を師制し、自負と傲奢を避け、謙りて當然他の稱賛を受くべきものを深く韜晦し、凡ての事と凡ての智識に於て有益なる効果を收めて、神の賛美榮光を求めしむるなり

聖愛は自己と自己に屬するもの、公然稱揚せらるるを好まずして、一片の愛より萬物を興へたまふ神の其恩賜に於て頌へられんことを冀ふ

(三) 此聖愛は則ち人性に超ゆる光明なり、神の一個特殊の賜なり、又被選者固有の記徴、涯なき拯救の證なり、是



十 四三〇

一 創一〇  
二六

人を高め地上の物を去て天の事物を愛するに至らしむ  
 三め肉を離れて靈に屬するものとならしむ  
 是故に私愛を壓服すること、強ければ愈大なる  
 聖愛の注入を得而して、毎日に新しき慰問を受て、哀なる人は漸く神の象に改めらるゝなり

第五十五章

人性の罪深き事神恩の勢力あり

(一) 主よわが神よ主は聖像に肖りて我を造りたまへり願  
 ば我を罪科と滅亡に誘ふ所のわが至兇なる性に克

口 羅七〇  
二三

ハ 創八〇  
三六  
二六

しむる恩恵を興へ給へとは曾て主の示したまひし如  
 く拯救の爲に緊切缺ぐべからざるものなり何となれ  
 ば我心意の法則に敵し又我を擲へて多くの事に於て  
 肉慾に従はしめんとする罪の法則の我肉慾にあるを  
 感知し又爾の至聖なる恩恵熾んに我心に注ぎて我を  
 援けざれば其情慾に抗すること能はざればなり  
 主よ人は其稚き時より絶えず惡事に傾ける性あり我  
 之を鎮服せんが爲主の恩恵を要し且豊かに之を領け  
 ざるべからず蓋し人の性は太初の人アダムにより罪

第五十五章 人性の罪深き事神恩の勢力ある事



の爲に墮落廢腐し此過失の刑罰は凡ての人類に傳は  
りて主の善且義に造りたまひし性も今は一に罪惡柔  
弱なる邪性を指すに至れり若し此性自然の働作に任  
せば其傾僻惡事と賤事に赴き且僅かに存せる力は怡  
も灰裡に埋もれる閃火の如くなればなり是則ち性理  
を云ふなり大なる闇黒に圍まれ凡て其意に嘉するこ  
とを就すこと能はず又既に眞理の満光を受ることな  
く其愛情の完全をも缺くと雖も尙依然として眞偽善  
惡を區別するの力あけ

二傳七〇  
三九  
八餘八〇

二三  
三〇

水羅七〇  
十二  
へ同上七  
〇三三  
〇三三  
〇三三  
〇三三  
〇三三  
〇三三  
〇三三  
〇三三

ナ羅七〇  
十八

是故にわが神よ我は主の聖誠の善義聖淨にして凡て  
の罪と惡事をも避くべきを戒しむるを知るが故に與  
なる人を以て汝の法則を喜となすなり然れども我情  
慾に従ひて性理に従はざるるときは肉に於ては罪の法  
則に事ふるなり  
是故に善なるものを欲するの意は我に在れども如何  
にこれを實行すべきかを知らざるなり  
是故にわれ屢は多くの善事を企つれども我孱弱を助  
ぐる恩惠のなき爲に輕き妨障のためにも驚退失心す



十八  
〇

約十五  
〇  
四〇  
三二  
二二  
十二  
〇

るなり  
 是故にわが完成の道を知り瞭然わが行ふべき方法を見るときは自己の腐廢の重きに壓せられて更に大なる完成に至らざるなり  
 (二) 主よわれ善事を始め之を進行し之を成効せん爲めに實に汝の恩恵の必需なること如何ばかりぞや若夫れこれなければ我一事をも爲すこと能はずして汝の恩恵われを勤むるときは汝によりて萬事を能くすれば

〇十四  
十

二〇十三  
十

恩恵は實に天に屬して貴きものなりもしこれなければ我至高なる動作も空しく本性の才も數ふるに足らざるなり主よ汝の恩恵なくば技藝も富も美も魅力も又聰明も才辨も皆汝の前に毫も價値なし蓋し本性の才は善人悪人ともに有ものなれども被撰者の受る特別の賜物は恩恵と愛とにして此尊章を佩るものは涯りなき生命を受るに足るものとせらるゝなり此恩恵は實に貴重にして預言の賜物も奇跡の業も又如何に高き觀念も之によりざれば何等の價もあらざるなり



ル哥前十  
二〇十三

ヲ詩九十  
〇十四

否是のみならず信仰希望および凡て他の徳義と雖も  
恩恵と愛なければ汝之を喜び給はざるなり

(三) 嗚呼望まじき哉恩恵心の貧しき者をして徳に富ませ

諸の財貨に富るものをして心を卑しくせしむ願く

は我に降り爾の安慰を以て早く我を充滿しめ給へ然

らざれば我魂は心意の乾燥と困頓のために萎み衰

べん

主と願くは我をして汝の前に恩恵を得させ給へ蓋し

て我本性の欲する所の他物は得られざるべしと雖

ヲ哥後十  
二〇九

も我は汝の恩恵を以て足れりとなすが故なり假令多

くの患難に試み苦めらるるも汝の恩恵にして我を離

れざる間は我は禍害を恐れじ此恩恵は即ちわが力わ

が智わが助なり凡ての仇よりも強く凡ての智者より

一も賢きなりこれ眞理の師懲戒の表心の光明 患難の

時の慰藉悲歎を拂ふもの恐怖を斥る者虔信の保傳涙

の泉源なり若しこの恩恵なくば我は如何なるものぞ

や只一片の枯木又棄てらるべき益なき柯のみ

是故に主と恩恵を以て常に我先となり後となりて間



斷なく諸般の善事を行はしめたまはんことを聖子  
イエスキリストによりて希ひ奉るアーメン

第五十六章 己に克ち又十字架によりて基  
督に做ふべき事

(一) 我子よ汝おのれを脱すること益多ければ又ますます  
多く我に入ることを得べし凡ての外物の欲望を除  
け汝心に平安を生ずる如く心に己を捐れば神と結び  
合ふなり  
嘗て齟齬怨言することなく全く自己を棄てし我意に

二〇八  
マテオ十

イ約十四  
〇六

十二  
四〇

十  
四

六  
二

三  
一

提前六  
〇十二

準ふことを習ふはわが汝に願ふ所なり

汝われに隨へ「我は途なり真理なり生命なり」

途なくば往くものなく真理なくば知ることなく生命

なくば生活するものなし我は則ち汝の従ふべき道信

憑すべし真理希望すべし生命なり我は冒すべから

ざる道誤ることなき真理又涯りなき生命なり我は至

直なる道至高なる真理誠なる生命福なる生命又創造

せられざる生命なり汝もし我道に止らば真理を知る

べし真理は汝をして自由ならしめ又永遠なる生命を

第五十六章 己に克ち又十字架によりて基督に做ふべき事 四七九



○十二  
ハ路六  
○三  
○七  
○九  
○太十九  
○二一  
ハ同上  
六〇二四  
ト路十八  
○十四  
チ同上  
四〇二七  
提後二〇  
十二  
○六  
ト路十四

搏取せしめん  
汝生命に入らんと欲せば聖誠を守れ眞理を知らんと欲せば我を信ぜよ圓滿ならんと欲せば萬物を售れ我門弟たらんと欲せば全く己を棄てよ福なる生命を有せんと欲せば現在の生命を輕んぜよ天に於て高くせられんと欲せば此世に於て自ら卑くせよ我と共に王たらんと欲せばまた我と共に十字架を負ふべきなり何となれば幸福と眞正なる光明の道を得べきものは唯十字架の僕のみなればなり

四八〇

一太十  
二四  
約十三  
十六

二一  
〇十七  
〇十三

(一) 主イエスよ汝の行く所の途窄少にして世の侮る所となれり願くは我をして世の侮辱を受るとも汝に摸はしめ給へこれ僕は其主に優らず弟子は其師に超ゆるればなり  
(二) 汝の僕をして汝の生命を知り又之を習練せしめたまへこれ我拯救と眞正なる清淨とは是に因るが故なり之を除きては我如何なる書を讀み如何なる言を聞くとも全き補養と欣喜を得ざるなり  
(三) 我子よ汝すでに凡て是等のことを讀み且知りたるが

第五十六章 己に克ち又十字架によりて基督に倣ふべき事 四八二



三 故に之を行へば福ならん我誠を保ちて之を守る者は我を愛するなり我また之を愛して彼に己を示し又彼をして我父の國に於て我と共に座せしめん  
主イエスよ汝の云ひ且約したまひし如く我にあれかし願くは我をして此恩恵を領るに足るものとなさしめ給へ我は十字架を受けたり汝の聖手より之を領けたり我は之を負はん汝のわれに置きたまひしまゝに死に至るまでも之を負はん宜なり良き隠士の生命は十字架にして是亦樂園に至るの業なり今既に之に着

手したり志を翻すは正しからず又企圖せしことを廢するも宜しからざるなり  
(四) さらば兄弟よ吾等勇を鼓して共に進まんイエスは我らと共に在したまはんイエスの爲に此十字架を執りたり耐へ忍びてイエスの爲此十字架を負はん彼は手引となり前驅となりて我らを助るものなり看よわが王は我らに先て行き我らの爲に戦ひたまはん我ら勇ましくして従ひ如何なる恐怖をも懼れず盾を戦死の覺悟をなし又十字架を捨て奔るの卑怯ありて光大の



榮名を失墜することなかるべし

第五十七章

過失に陥ることありとも甚し

く落膽すべからざる事

(一) 我子よ富昌のときに大なる慰藉を得て熱愛なるより

も艱難の時に忍耐と謙遜なるはわが慕ふ所なり

汝は何故に凡て些細なる毀言のために憂ふるや誹謗

もし更に大なるとも之が爲に揺かさるべきにあらす

今は之を意とする勿れこれ初發の事にあらす又新事

にもあらすして汝の生命永ければ又これ最後にもあ

二十  
二十  
六〇

らざるなり

汝逆運にかゝらざる間は十分の勇氣ありて能く人

の爲に謀り言語を以て他を勵ますことを得るも若し

患難遽に汝の門に至るときは謀議と力を失ふなり

さらば汝の太だ脆弱なるを察すべしこれ屢ば小事に

於ても汝の覺知する所なり然れども斯る試誘の生じ

來るは汝の利益となるなり

汝患難に遇ふときは力を盡して心よりわが十字架

の苦を回顧すべし汝災害に苦むとも倒るゝことなく



又長く憂ふること勿かれもし欣然之に耐ゆること能  
はずとも忍んで以て之に耐ゆべし假令聞くを喜ばざ  
ることありて是が爲に憤志を興すことありとも自ら  
制して彼の嬰兒を躪かすべし失言を口より發するこ  
と勿れ今吹き起れる嵐は速に風まん心の惆悵は恩  
惠の復歸によりて慰められん主曰く我尚活く汝わ  
れを頼みとし度しく我を呼べばわれは準備をなして  
汝を助け以前に増したる大慰藉を與ふべし」と  
なんおの忍耐を増し更に大なる堪忍を備ふべし若し

毎時患難を受け劇しき誘惑ありと自ら感ずるとも汝  
萬事を失ひたるにあらざるなり汝は人にして神にあ  
らず肉にして天使にあらざるなり天に在る天使も墮  
ち樂園に於る太初の人も落ちたるも汝争でか常に徳  
義の同じ状態に存するを得んや我は則ち悲歎の人を  
高く擧げて安全ならしめ又自己の怯弱を知る者を引  
起して我聖き榮光に薦むるものなり  
(二)主よ主の聖言は稱ふべき哉わが口に甘きこと蜜より  
も蜜房の滴瀝よりも彌増れり爾もし其聖なる談話を



以て我を慰めたまはざれば此大なる患難究阨を如何にせん若しわれ終に拯救の港灣に達するを得ば何んぞ其思苦の多少如何を論せん願くは我に善き終焉を興へ我をして福に此世を超え渡らしめ給へ我神よ願くは我を憶ひて汝の聖國に到る直き路に導きたまへ  
アーメン

第五十八章 高遠なる事と神の秘かなる審判とを涙りに精究すべからざる事

(一) 我子よ汝謹んで高遠なる事物若くは神の秘かなる審断に容喙して彼は何故に斯く捨てられ此は何故に此の如く厚顧せられ又甲は何故にかく患難に沈み乙は何故に大進歩をなせるやといふこと勿れ是等は人智の及ばざる所にして神の審判を探見すること理由論諍の力にあらざるなり  
故に仇敵もし汝に是等のことを告げ奇を好むの人此問を起すことあらば汝は彼の預言者の如く答ふべし  
「主よ汝は方義にして汝の審判は直し」又「主の審判

第五十八章 高遠なる事と神の審判を妄究すべからざる事 四六九



は眞實にしてことごとく正し」と

我審判は畏るべくして諍ふべからず是人智を以て了

解し難き所のものなればなり

是と等しく聖徒の徳功を駁論して彼は此よりも聖に

して此は天國に於て尊からんと評すること勿れ是等

は毎時争ひて益なき口論を生じ高慢と虚榮の心を養

成し又是より嫉妬と分離を萌牙して甲は傲然と此聖

徒を執りてはまた彼の聖徒を執らん抑もかゝる事を

探ね知らんと欲するは無益にして聖徒の心を痛まし

むるものなり何となれば我は諍論の神にあらず和平

の神なり其和平は自尊によらずして却て眞正なる謙

遜によればなり

或は熱烈なる愛情に引かれて彼を貴み此を親むの

偏あれどもそは必竟人の愛にして神より出る聖き

愛にあらず我は凡ての聖徒を造り彼等に恩恵を與へ

又彼等をして榮光を得せしむる者なり我は彼等の功

績の有無を知り我は善き賜もの、恩恤を以て彼らを

迎へ世の開始に先立て豫め我愛する者を知れり彼ら



先われを選びしにわらず我世の中より彼らを選びわ  
 れ恩恵を以て彼らを呼び憐恤を以て彼等を招き區々  
 なる試惑の間を安全に導き貴き慰藉を注ぎ又彼等に  
 堅忍の心を與へ其忍耐に冠するものなり我は最先な  
 る者最後なる者を知り量り難き愛を以て彼らを悉く  
 抱くなり我は凡て我聖徒に於て讃められ其殊功なき  
 に拘らざわれ斯く豫定して榮光を以て高く陟げたる  
 各人に於て尊敬讚美せらるべきものなりさらば我最  
 微なる者を侮るは最大なる者をも敬はざるなり何と

十詩百五

十詩百五

なれば我は大なる者をも小なる者をも造りたればな  
 り我聖徒を誘ふものは又我と天國に在る者は皆合せ  
 て講るなり是等皆愛の紐にて一結され思想も同じく  
 志望も一なり而して皆互に相愛す而して尙至高なる  
 ものあり則ち自己と其功勞を愛するに勝りて我を愛  
 するなり彼らは自己と自愛の念に卓抜して我を愛す  
 ることに全心を注瀉し又至き満足を以て我に憩へり  
 何ものか彼らを退げん何ものか彼らを壓せん蓋し彼  
 等は永遠の眞理に盈ち充て熄へざるの愛の火を以て



熾ればなり

されば唯私の喜樂の外何もをも愛すること能はざる肉性なる人は神の聖徒の状態を論ずることを慎むべし斯るものは永遠なる真理の意向を願ずして自己の想ふままに増減を爲すなり無智なる者多し僅々光明を受けたるもの殊に然り是れ完然なる聖愛なくして何物をも愛すること能はざればなり是等のものは多く人性の至情至愛の爲に彼に此に誘はれ地上の愛は於て自ら得し經歷によりて天の事物を想像する

なり然れども完からざる人自負の心を以て想像する所と光明に照されたる者の天啓によりて観る所とは其差天壤も甞ならざるなり

二一  
三〇

(二)是故に我子よ心して汝の智識に過ぎたる奇事を論ぶことなく却て神の國に於て最劣の地位たりとも之を得んことを緊務專勤となすべし假令聖徒の中孰か他に優りて淨く孰か天國に於て最貴なるべきかを知る人ありとも若し其人我前に愈謙り而して起ちて我名の讚頌を増すにあらざれば此智識愛を彼を益せん



神の更に喜びたまふ者は己の罪の大なること其徳の寡きことを念ひ又聖徒の優劣を論ぜずして己の完成なる聖徒に及ばざること如何ばかりぞやと思ふ所のものなり

人若し自ら安んじて虚しさ諍論を謹めば聖徒は乃ち實に快然安さに居らん彼らの自ら功德に驕ることなく涯りなき愛により萬事を賦へたるわれに萬事を歸し一の善をも其身に歸せざるなり彼等は神を深く愛する愛に充ち其歡喜溢るゝが故に何等の幸福も何等

三一  
三〇

十四  
六〇

十  
四〇

五〇八

一  
六

正  
六  
六  
十

の榮光も既に缺くる所なし凡て聖徒たるもの益高き榮光を受くれども益自ら謙り彌ますゝ我に親近して愛せらるゝなり故に録して曰く「彼等神の前に其冠を投じ羔の前に伏して世々涯なく活きたまふ者を拜みたり」と

(三人多く神の國に於て最も顯貴なる者は孰ぞと問へども自己は嘗て最微者の數にも入り得るや否を知らざるなり天に於て最劣なるものとなるも甚だ大なることなり是彼處に在ては凡てのもの大なるものにして



ル賽六十  
〇三二

ナ同上六  
五〇二十

マ太十八  
〇一四

カ太七〇  
十四

皆神の子と稱へられ神の子となるべければなり」最  
 微なる者は千となり」壽百年に達するも罪人は死せ  
 ん」弟子たち天國に於て最大なるものは孰ぞやと問  
 ひし時我之に答て曰く「汝ら改まりて嬰兒の如くな  
 らずば天國に入ることを得じ然らば凡そ此嬰兒の如  
 く自ら謙る者はこれ天國に於て最も大なる者な  
 り」と  
 嗚呼嬰兒と共に欣然自ら遜るを肯んせざる者は殃  
 なる哉何となれば天國の矮き門は彼等を入れざるべ  
 かり」と

ヨ路六〇  
二四

タ路六〇  
二十

レ約参三

イ詩三十  
九〇七

ければなり又此世に於て慰藉を有する富者も殃なる  
 哉是れ貧者の天國に入る時彼等は門外に立て哀泣す  
 るが故なり  
 謙る者よ大に喜べ貧しき者よ讚美せよ神の國はこ  
 れ汝等のものなればなり但謹みて眞理に従ふて歩む  
 べし

第五十九章 期望と信託は凡て神にのみ定

置すべき事

(一) 主よこの世に於て我倚托すべきものは何ぞや又天下



一) の諸物より得る所の最大なる安樂は何ぞや主なる我神よ是たゞ汝のみにあらずや汝の憐恤は實に數へがたきなりわれ爾に離れて何時か幸福なりしや又汝われと共に在して何時か不幸なりしや爾を離れて富まらざりも我は寧ろ汝の爲に貧しきに就かん我は汝を離れて天を領るよりも汝と共に地上に旅客たらん天は汝の在す所に在り汝の在さるる所には死と冥府あり汝は凡ての我望なり故にわれは嗟嘆も號呼して切に爾に祈らざるべからず約言せば我に全然頼むべし

ものなき究極に際して能く我を助くる者唯我神なる汝あるのみ汝は我期望我安心我慰藉者にして萬事に於て最も誠實なり  
 人は皆自己の利得を營めども汝は唯わが利益と救拯を進め萬物を我益に向はしめ給ふ又我をして區々の試誘と災害に當らしむると雖も皆是をして我利便たらしむ汝は千百の方法を以て常に其愛者を試みたまふ者なり斯く我を試みたまふと雖も我なんぢを愛し讃むること恰も天の恩藉を我に充てたまふ時のこと



くすべきなり此故に主なる神よわれは至き期望と倚  
 頼を汝に措き我患難と憂悶を汝に托せん何となれば  
 我目に見る所汝を除きては何なるものにても凡て  
 辱く脆きなり  
 汝親らわれを救助し我を強くし我を慰め訓へ又我  
 を守護したまふにあらざれば衆友も益する所なく勤  
 援も助くる所なく謹肅なる顧問も益ある答を爲すこ  
 と能はず學者の著書も慰樂を給せず庫藏の寶貨も我  
 に救を興へず又如何に幽邃なる景色の地と雖も庇蔭

を興ふること能はざればなり蓋し平安福利を達就す  
 るに干係ありと見ゆるものも皆汝によらざれば虚無  
 にして實に毫しも福利を來さざればなり是故に汝は  
 萬善の終極生命の絶頂凡て言語に現しがたき智識の  
 奥底なり萬物の中第一に汝に望むことは汝の僕の爲  
 に至強なる安慰なりさればわが神よ慈悲の父よ我目  
 たし主を仰ぐ心惟主に頼るのみ  
 (二)願くは天の祝福を以て我魂を祝してこれを清めて主  
 の聖殿となし永遠なる榮光の座となし給へ又稜威の



二詩六九  
○十六  
ホ賽九〇  
二〇三  
ハ折第一

る聖眼を瀆すべきもの一も此神聖なる宮禁にあらし  
めたまふこと勿れ主の大なる慈善と無数の隣により  
て我を顧み汝に離れて遠く死蔭の地に放れたる賤し  
き僕の祈を聴き給へ此朽つべき生命は危害甚だ多し  
願くは主の臣隷の魂魄を禦衛し恩恵を以て我を伴ひ  
平安の道に導き永遠の赫耀ある故郷へ至らしめ給へ  
アーメン

世範卷之三終

イ太八一  
○廿八

口約六〇  
五十一  
六十三  
ハ太廿六  
○廿六  
○廿六  
○廿六

世範卷之四

聖餐を受授するの要訓

主白く凡て勞れたる者又重きを負へる者は我に來れ我  
汝等を息ません

我が與ふるパンは我が肉なり世の生命の爲に我之を與  
へん

取りて食せよ此は汝等の爲に擘かるゝ我が躰なり汝ら  
之をなして我を記念せよ

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事



二約六〇  
五〇六

我が肉を食ひ我が血を飲む者は我に居り我も亦かれに居る

ホ約六〇  
六十三

我汝等に言ひし語は靈なり生命なり

ホ約六〇  
六十三

第一章 基督を領くるに大なる恭敬を以て

ト六十一

すべき事

(一) 永遠の眞理なる基督よ右に掲ぐる語は一時の説諭又一所に記したるものにあらざれども此皆主の云ひ給ひし所なり然れば此聖言は我必らず感謝と信實を以て皆之を領くべきなり抑此語は主の聖言にして主

ト六十一

ト六十一

誠に之を發言し給へり且此は我が救ひの爲に云ひ給ひし所なれば亦我がものなり我喜んで此語を主の口より領け我が心中に種樹すべし蓋し此語は最も甘き慈言にして仁愛の極なれば大に我を斯ませり然れども我罪大にして惶懼多く心汚穢なるが故に斯の如き大なる奥義を領くるを得ざらしむ我主の甘言の爲に勸諭を受くれども罪重きが故に阻壓せらるゝなり若し主と關係あらんと欲せば必らず堅信を以て來り永遠の生命と榮光を得んと思はゞ不死の糧を領くべ

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事



しと命じ給へり其語に曰く凡て勞れたる者又重荷を  
負へる者は我に來れ我汝等を息ませんと嗚呼主なる  
我神よ貧しく且賤しき者を招きて主の聖牀の響應に  
與らしむるの此言は誠に罪人の耳に如何に甘く且愛  
すべき哉

夫れ我は如何なるものなれば主の前に至るべき乎見  
よ諸天の天すら主を容るゝに堪へざるに主は却て我  
等を招きて曰く汝等凡て我に來れと主の大仁なる愛  
を施して以て我等を招けり其聖意果して如何ぞや我

主の前に進む微少の善事あるも知らざるに如何で輕  
々しく主の前に近くべきや我已に多次我罪を以て主  
の慈顔に忤ひしものなれば如何で主を我陋室に接待  
んや天使と天使の長は主を恭敬ひ聖徒と義人は皆主  
を敬畏せり然れど主は我等を招きて曰く汝等皆我に  
來れと主倚し親しく此聖言を出し給はざれば誰か此  
眞成なるを信せんや又是れ眞に主の命令にあらざれ  
ば誰か主の前に進むを勉めんや  
夫の義人なる諾尼すら僅の人と俱に救はれんが爲に

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事



百年の永き工勞を積で漸く其方舟を造れり然れば我  
 暫時にして如何にか妥當の恭敬を以て天地の造主を  
 迎ふべき準備をなすを得んや  
 主の至愛なる大僕摩西は朽ちざるの木を以て聖櫃を  
 造り純金を以て其上を蔽ひ内に法律の二石板を藏め  
 たり我は是れ朽壞の人なり如何にか輕しく律法の立  
 法者又生命の與へ主なる神を領くべきや  
 又所羅門はイスラエルの諸王中に在て智者なり王は  
 主の榮光を顯さんが爲に宏壯なる宮殿を造營して七

年の星霜を費したり彼れ又其落成を祝せんが爲に入  
 日の間奉堂の饗應を行ひ酬恩祭の爲め百萬の犧牲を  
 捧げ又大なる喜悅を以て音楽を奏し殿内に設けたる  
 正しき位地に契約の聖櫃を安置せり我は是れ衆人の  
 中に於て貧窶く且憐なるものなれば何を敢て主を我  
 が陋室に延請することを得んや我は片時も敬虔に心  
 を用ふることを難し願くは一次たりとも其片時を正當  
 有益に費すことを得ば誠に幸福なり  
 (二) 噫我神よ此人々は神の聖意に適合はんが爲に如何に

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事



力を竭し勉めしや嗚呼何ぞ其れ我が行爲は弱脆き乎  
 嗚呼何ぞ其れ我が主を領くるの準備は短き乎我は全  
 く我が心を收むること少く又全く世の繫累を免かる  
 ること希なり我が心の中に宿すべきものは天使にあ  
 らずして諸の天使の主なれば實に救ひを與ふる主の  
 前には惡念邪情を以て侵すべからず又造られたるも  
 のも漫に入るべからず  
 夫れ諸聖品を藏めたる契約の聖櫃と妙なる聖徳を備  
 へたる主の聖牀とを比せば其差果して幾許ぞや又將

來の模倣なる律法上の犠牲と古の犠牲を全ふせし主  
 の聖牀の眞成なる犠牲と相較れば亦其差幾何なるや  
 知るべからず我は何故に最も貴き主の前に在りて燎  
 の如き熱き心を發せざるか彼の諸列祖豫言者國君及  
 び衆民皆克く敬虔の心を發して主に奉仕ふるに我は  
 蓋を聖餐を領くるに一層大なる恭敬の心を起して其  
 準備を爲さざる乎  
 (三) 夫れ熱心の敬虔者マビデ王は神の其先祖に恩恵を加  
 へ給ひたるを憶ひ起し神の聖櫃の前に在りて力を極

第一章 基督を領るに大なる恭敬を以てすべき事



めて欣舞踴躍し且幾多の樂器を造り詩を作り伶人を  
 設けて之を喜び誦ふことを示命し又聖靈の恩和に充  
 たされて自ら琴瑟を弾じて屢誦ひ或はイスラエル  
 人を教へて毎に全き心を以て神を稱賛し朗らかなる  
 韻聲を發して日々感謝讚美を爲さしめたり其時契約  
 の聖櫃の前に在るもの皆大なる愛を發して神の恩惠  
 を記憶して讚美稱へたりされば今我と基督を信する  
 者は聖奠の式場に於て基督の聖躰を領くるに當り如  
 何に熱愛尊敬の心を持つべき乎

(四) 人多く遠地に往き聖徒の留むる蹟を敬視し其行爲を  
 駭き聞き又仰ひて廣大なる殿堂を視又恭しく錦繡の  
 臺中に就て聖骨に親吻す況んや我が神は聖の聖、人  
 類の造り主及び諸天使の主にして親しく聖臺に臨御  
 して我と共に在すをや  
 夫れ人の外に出て聖徒の蹟を視るは唯其奇古を見異  
 聞を聽て其耳目を樂ましむるに過ずして言行を正し  
 くするの益は至て尠し殊に罪を悔ゆるの心なくして  
 諸所に浮遊する時は更に其身を益することなし然る



に聖臺せいだいに在る聖餐せいさんには我神わがしんにして人なる基督キリスト耶穌イエスの  
 現存げんぞんし給へば我々われら恭敬こうけいしく之これを領うくる毎ごとに永遠とこえんの救きう  
 ひに拘かはる好果かうくわを豊ゆたかに領うくることを得うべし抑おさ此これを  
 領うくるは徒いたづらに浮薄うはくに流ながれ見聞けんぶんを好このみ又また情慾じやうよくの誘いざなひ  
 に従したがふにあらず則すなはち實じつに堅かたき信仰しんかう熱あつき冀望きぼう誠まことの愛心あいしん  
 に因よるなり

(五) 隱見あひみるべからざる天地てんちの造つくり主なる神かみよ主しゆの我等われらを  
 遇あひし給ふ所何たまたまぞ其妙そのたへなるや主しゆは簡かんびし者ものを惠めぐみ自ら  
 其聖躰そのせいたいを興あたへて我等われらの糧かてとなせり何なんぞ其その厚あつく且甘かつあま

き乎かこ此このの大おほいなる恩遇おんぐうは人智じんちの及およばざる所ところにして最もつとも  
 敬虔けいけん者の心こころを誘引いういんし又また其愛情そのあいじやうを惹起ひきおこすべし如何いかんとな  
 れば誠實せいじつを以もつて一生いつしやうの言行げんかうを改悛かいしゆんすることを勤つとむる  
 忠信ちゆうしんなる主しゆの僕しもべは此最このもつとも尊たふとき聖餐せいさんを領うくれば則すなはち  
 屢しばしば熱心ねつしんなる敬虔けいけんに進まり又また徳義とくぎを愛あいする心こころを棄あきらめ諸  
 の善ぜんに向むかふに至いたるべし

(六) 嗚呼あゝ秘隱ひいんなる聖奠せいでんの恩惠おんけい實じつに妙めうなり惟たゞ基督キリストに忠信ちゆうしんな  
 る者ものは之これを知覺ちかくすされども信しんなき者もの又また罪つみの下僕しもべとな  
 る者ものは之これを味あじふことを得うざるなり夫それ此この聖奠せいでんは靈魂れいこん



上の恩恵を與へられ既に失ひたる靈の力を復し又罪によりて汚濁れたる美を復歸することを得べし又此恩は時として廣大なるが故に之に依る熱愛に充たされて心のみならず其弱き軀軀も亦大に力量加はることをあるを覺ゆん

(七) 惟愛ふべく憐むべきは人の心冷淡にして怠惰多く基督を領くるに熱心ならざることなり蓋し救はるる者の完全さ希望と其功は主基督により主は自ら聖の源となり我等の贖ひとなり又此世に旅客たるもの慰

め聖徒の永遠き幸福となり給へばなり又此恩の奧義は救の源にして天の喜ぶ所全世界を保有するものなるに人多く茲に注意せざるは誠に愛ふべきの至りならずや

噫人心の暗味頑硬なること此恩の妙を感せず又常に其恩を受くるに慣れ其妙の深さを思はざるは誠に恠むべきなり若し世間唯一の所にのみ此至聖なる聖愛を行ひ一の長老のみ之を聖成するものならば人々必らず大なる熱心を以て其地に到り其長老を慕ひて其



奥義の執行を見聞せんことを希ふべし然れども今や  
 幸に許多の長老あり基督の犠牲を捧ぐる處許多ありて此聖なる交接の全世界に普及し従て神の恩恵を與ふること又人を愛し給ふこと益大に顯はるゝなり  
 永遠に在す善き牧者なる主耶穌に感謝す主は其愛に因り聖なる脉と血を以て我等の如き貧困流竄なる者を補養し此聖典を興んが爲め自ら聖言を發し我等を招きて曰く汝等凡て勞れたる者又重荷を負へる者は

我に來れ我汝等を息ませんと  
 第二章 聖餐に於て神の大なる慈愛の人間に顯はるゝ事  
 (一) 主よ我主の大なる愛憐を待みて主の前に到れり即ち隣れなる病者とならば救主に往き飢渴者とならば生命の泉に行き究迫者とならば天國の王に到り下僕は其主に到り造られたる者は其造主に行き愁ふる者は慈悲深き慰主に行くなり  
 夫れ主は何に由て我に來臨る乎我何人なれば主は自



らを我に賜ふや罪人如何で主の前に出でんや主も亦  
 何を肯て罪人に來臨んや惟主は能く僕の心を洞見し  
 此恩を興ふべき些少の善なきをも知り給へり  
 我は自ら至賤なるを言ひ顯はし主の至慈なるを認め  
 我は惟主の仁惠を讚美し又主の愛究なきにより主に  
 感謝せり蓋し主の此恩を加へ給ふは我微力によるに  
 あらず主の榮光の爲なり是れ主の恩惠を猶明らか  
 我に顯はし尙深く愛を我に施し又主の謙遜を完全に  
 示さんが爲なり既に主の聖意に適ひ亦主之を命令し

給ひしが故に我喜びて此恩を領けんとす願くは我罪  
 此阻碍とならざらんことを  
 柔和にして最と仁惠深き耶穌よ主の聖なる跡を領く  
 る時は如何なる恭敬を以て感謝し又絶えず之を讚美  
 すべき乎其興義の貴くして妙なること誰か言語を以  
 て云ひ盡すべきや然れども我主に近寄り我主に交接  
 するに至りては如何なる思考を以てすべき乎我正し  
 く之を尊敬し能はざるも恭しく之を受け容るゝを願  
 ふなり臆有益なる考案と善き思慮は他ならず只自ら



口詩七十  
八〇廿五  
ハ約六〇  
三十三

主の前に謙遜し且我上に無究き主の恩恵を奉揚すべ  
し我神よ我は永遠に主を稱讚し我身を蔑如し而して  
其卑下なるに感じて主の前に拜伏せん  
主は誠に聖の聖なるものなり我は誠に罪人中の汚穢  
物なり我は仰ひて主に向ふに足らざれども主は自ら  
我に臨み給ふ主は誠に我に來臨り我と俱に在すを好  
み饗應の席に我を招きて天の糧を與へ天使の食を喰  
ましめ給ふ是れ天より降りて生命を世に與ふる生る  
パンにして即ち主なり

ニ詩百四  
十八〇五

一見よ此愛は何所より出る乎此隣恤の光輝は如何に耀  
くか此が爲に主に歸すべき感謝讚美は將た幾許をや  
夫れ此聖典を設け給ひし主の聖意は有益にして又救  
ひを與へ給ふなり主は己を以て我食となし給ふ此饗  
應は誠に美哉甘哉主よ主の所爲誠に妙なる哉主の  
能力誠に大なる哉主の眞實は言ひ盡し難き哉主一度  
聖言を降し給へば萬物成な成れり且今主の命と給ひ  
し事も亦已に成れり主なる神よ主は眞の神眞の人に  
して僅少のパンと酒中に入り人の爲に匱ざる飲食物



と爲り給へり是れ誠に人智の及ばざる奥義にして最も信すべき所なり

夫れ主は萬物の主宰にして物に乏しき事なきも此聖靈によりて我等の心中に泊り寄りんとし給へり願はば我が心と脉を清潔に保ち給ひて我をして喜ばしく且清き心を以て主の榮光と永遠の紀念の爲に聖成しと立て給ひし此奥義を屢執行せしめ且拜受せしめて永遠の拯救に與らしめ給へ

(二) 我靈魂よ喜べ斯の如き尊き賜物又非常なる慰藉を此

泣涕の谷に遣し給ふ神に感謝せよ汝此奥義を回想し基督の聖脉を領くる毎に主の贖罪の聖業抄取り汝も亦基督の總ての功績に與かる者となるなり夫れ基督の愛は常に減ずることなく其贖ひの大なる功績も亦共に竭きざるなり

汝宜しく日々に心を新にし之を領けんが爲に其準備を怠らずして専ら拯救の奥義を懇到追憶すべし此に因りて此聖典の受授ある毎に怡も基督は其日初めて降りて處女の胎内に宿りて人となり給ひ或は其日十

第二章 聖餐に於て神の大なる慈愛の人間に顯はるゝ事 五二七



十字架に釘り人間の救ひの爲に苦を受けて死し給ひし如く其恩の大なる事新らしき事喜ばしき事を感ずべきなり

第三章 屢聖餐を領ぐれば最も益ある事

(一) 主よ我主の前に到り主の賜物によりて益を受け神の恵を以て貧者の爲に供へ給ひし此聖なる饗應を受けて喜びを得んと欲す凡て我望む所願ふべき所惟是れ主に在り主は我拯救、贖罪、希望、勇氣、美譽、榮光なり

イ詩六十八〇十一

口詩八十六〇四

ハ太十九〇九

〇三十二  
ニ太十五

故は今主に願ふ主なる耶穌よ我は主を仰ぎ望めば僕の靈魂を悦ばせ給へ我は熱心と恭敬とを以て主を領くるを願ひ主を我室に請け又ザアカイと共に主に祝せられアブラハムの子に數へらるゝ恵を受けんと欲せり我靈魂は主の聖躰を欣慕し我心は偏に主に結ばんことを願ふなり願くは己を我に與へ給へ然らば我足れん是主の外我を慰むるものなければなり  
主若し在さいれば我は存在すること能はず主若し貴臨まざれば我活動すること能はず故に我屢主の前に

第三章 屢聖餐を領ぐれば最も益ある事 五二九



二十六十五  
〇三十二

〇六  
ハ六十六

六〇四  
口六八十

至いたり我われ靈れい魂こんの救きうひの爲ために主しゆの聖せい躰たいを領うけざれば天てんの糧かてを奪うばひて途みちに憊つかれ困くるまん憐あはれある耶イエス蘇すよ主しゆは曾かつて教をしを人ひと々に説またらるく病やまひを愈いやせし時とき言いひ給たまひし事ことあり我われ彼かれ等らを飢うませて去さらしむるを欲このまず恐おそらくは途みち上じやうにて惱なやまんとされば斯かくの如ごとく我われをも待まち給たまへ蓋そは此この聖せい餐えんに於おいて信しん仰かうある者ものを慰なぐさめんが爲ために己おのれを遺のこし給たまへばなり夫それ主しゆは靈れい魂こんの美みなる糧かてなり主しゆを正ただしく食しよくすれば主しゆの永とこ遠えんの榮は光くわうを受うけ嗣つぐものとなるべし然しかれば則すなはち我われは屢しばしば迷まよひ屢しばしば罪つみを犯かし速すみに冷れい淡たんとな

六〇八  
廿一

〇六  
ハ六十五

り又また倦つかみ勞らうる者ものなれば必かならず屢しばしば祈いのり禱と懺ざんげ悔をなし主しゆの聖せい躰たいを領うくるに依よりて己おのれの心こころを新あらたにし淨きよく且かつ熱あつくすべきなり恐おそらくは久ひさ潤しく之これを受う領うけされば我われ清せい潔けつなる志こころざしを變へんせん夫それ人ひとの心こころの圖は維かる所ところ其その幼ちやう少せうの時ときより惡あくしければ聖せい藥やくを以もつて之これを補ほ助じよせざれば愈いよく惡あくに陷おちらん故ゆゑに主しゆは即すなはち聖せい餐えんの恩めぐみにより人ひとを挽ひきて惡あくに入いれず強つよめて善ぜんに進ましめ給たまへり今いま我われ聖せい餐えんを領うけ又また其その聖せいなる式しきを行おこなふも尙なほ且かつ怠たい惰だと冷れい淡たんに陷おちるを免まぬがれざれば若もし此この聖せい藥やくを領うけず又また此この大おほなる佑たすけを求もとめざ



其時は我身は將に如何になるべき乎我假令日々之  
 を受授するに充分の準備をなし得ざるも但相當の時  
 に於て心を留めて此聖典に與り主の大なる恩を分領  
 せんことを勤むべし蓋し信仰ある靈魂主より離れて  
 此死すべし狀に在る間此聖典は即ち特慰の一にして  
 屢其神を記憶し又熱心を以て敬愛する主を領けし  
 むるものなればなり

へ番后五  
 〇六  
 廿一  
 廿八〇

(二) 主の我等に對する仁慈と謙遜は實に妙なる哉總ての  
 靈魂の造り主活し主なる神よ主は我を棄すして貧者

〇三  
 廿一

(一) 充飽しめ給ふ  
 の靈魂に降り充ちたる神性と人性を以て我等が饑を

我が主なる神よ熱心を以て主を領くるものとなり之  
 を領くるによりて靈魂の喜びに充滿さるゝことを得  
 ば其心は如何に幸福にして喜ばし哉夫れ此の如き  
 心は如何に大なる主人を延く乎如何に敬愛すべき客  
 を迎ふるや如何に樂しき伴侶を受くるや如何に忠信  
 なる友を受くる乎如何に尊美なる新郎を抱く乎實に  
 總て親愛する者に優り且都て欲望する物に勝れて愛

廿八〇  
 四正



すべきものなり

最と愛すべき主よ天地と其間に在る總ての粧飾は皆  
黙すべし是れ其美麗と稱揚べきものは皆主の興へ給  
ふ惠なれば物一として主の聖名の榮光に及ぶものな  
し蓋し主の全智は量りなく限りなければなり

第四章 敬信を以て聖餐を領くる者には多

非なる主なる多くの恵を賜ふ事

(一) 我神なる主よ主の慈愛の賜物を以て主の僕を迎へ熱  
心を以て正しく主の尊き聖餐に近付くことを得させ

ト詩百四  
十七〇五

イ詩廿一  
〇三

給ふ

願くは我心を起し主を慕はしめ頑懦を撤去し且主の  
救ひにより我に來臨し渴かざる泉の如き聖餐の中に  
豊かに含める甘味を我靈魂に味ふことを得させ給へ  
願くは我眼を明らかにして此大なる奧義を見せしめ  
之を信する爲堅き信仰を興へて我を強め給へ是れ主  
の所爲にして人の力にあらす又此れ主の聖なる定め  
にして人の發明する所にあらざるなり故に天使の智  
能すら測り得る所にあらす況んや人の智慮深きも如

口詩百六  
〇四

第四章 敬信を以て聖餐を領くる者には多くの恵を賜ふ事 五三五



何で自らの力を以て其妙なるを悟り得べけんや我は  
功なき罪人にして又塵の如く灰の如き身なりされば  
如何にして此貴重なる聖典を探り究むることを得ん  
や主よ我は質朴と堅信の心を維持し主の命令を奉じ  
冀望と恭敬を以て主の前に來れり主は眞の神眞の人  
に於て全く此聖餐の中に在まし給ふことを我は確々  
信するなり

四〇、四

天れ主の望み給ふ所は我をして主を領け又切愛を以  
て主と一脈ならしめ給ふこと是れなり故に我主の憐

みを乞ひて特別なる恩恵を與へ我をして主に對する  
愛に溢れしめ又主の外他に慰藉を求むることなから  
じめ給はんことを願ふ是れ最も大にして且尊き聖餐  
は身軀と靈魂の救ひとなり又精神怠惰の藥となり我  
惡事を愈じ我邪なる情慾を止め諸の誘惑に勝ち且  
之を少くし又更に聖恩を増し徳力を加へ信仰を堅く  
し冀望を確にし愛情を炎の如く熾にす  
(二) 我神よ主は我靈魂を保護し人間の荏弱を補ひ永遠の  
慰を與へ給ふの主なりされば熱心を以て聖餐を受

ハ詩五十  
四〇、四



領る主の愛し給ふものには曾て多くの恩を與へ今も  
 尙屢之を與へ給へり主は多くの苦惱を受くるもの  
 には大なる慰を與へ失望の究谷より救ひ上げて主の  
 保護を望ましめ新なる恩を以て其心中を強照し慰を  
 加へ給へり仍て聖餐に與らざる前憂鬱多く愛情少  
 き者も此の天の糧と飲料に養れて忽ち善に進むこと  
 を覺ゆべし  
 主は此の如く簡びし者を待遇ひ給ふが故に彼等は誠  
 に己の貧虚しきことを覺り現に主より出る慈愛を知

るに至らん蓋彼等は自ら頑硬冷淡なるものなれども  
 只主に便りて熱心と愉快と恭敬とに充たさるゝを得  
 ればなり  
 誰か謙りて甘き泉に近き其幾分かの甘さを携へ歸ら  
 ざらんや誰か燃ゆる火の前に立ちて多少の熱を受け  
 ざらんや況んや主は常に滿ち溢るゝ泉水然に熄まざ  
 る烈火なるをや我假令溢るゝ泉に近付くことを得ず  
 又十分之を飲むことを許されざるも我心の全く渴か  
 ざる中に天の管の下に到りて唇を接し其二滴たも嘗



め得て之を沾さんとす又假令ケルヒム及びセルビム  
 の如く天に在て愛の炎熾なるを得ざるも我れ力を奮  
 ひて準備をなし謙遜を以て生命の基礎なる聖餐を領  
 け天の烈しき火の焰炎だも求めんと思ふなり  
 至聖なる救主にして仁恵ある耶蘇よ我に缺けたる所  
 あらば大なる恵を以て之を補ひ給へ夫れ主は凡ての  
 人を其聖座に招きて曰く汝等凡て勞れたる者又重荷  
 を負へる者は我に來れ我汝等を息ませんと我顔に汗  
 して勞働さ心機の痛みに因て罪の重荷に勞れ誘惑の

爲に悲しむ多くの惡慾の中に迫られ縛らるれども我  
 を助くる者なし我を愈し救ふ者外にあらす惟主ある  
 のみ臆救主なる神よわれ己の總て己の物を主に委託  
 せり我を保護り永遠の生命に至るまで導き給はんて  
 どを願ふ主は聖躰と聖血を我飲食に供し給ひたれば  
 聖名の譽と尊榮を顯はさんか爲に我を受け入れ給へ  
 我救主我神なる主よ屢主の奧義を領くるによりて  
 益我熱心と愛情を熾盛ならしめ給へ

第五章 聖餐の尊き事并に長老の地位

第五章 聖餐の尊き事并に長老の地位

五〇二

五四〇



(一) 汝假令天使の清潔と施洗者の聖約翰の聖とを持つも  
 此聖奠を受授するには足らざるなり夫れ人にして  
 基督の聖餐を祝し天使の糧を己がものとなすは人間  
 の効力の及ばざる所なり大なる哉此聖奠重き哉長  
 老の職掌主は天使に許さるるものをかれらに授け  
 給ふ則ち聖公會に於て正當に任命せられたる長老に  
 限り基督の牀を祝して聖成するの權威を有せりされ  
 ば此長老は即ち神の仕人にして神の言語を用ひ神の  
 命令と其定めに従ふなり然れども神は彼所に在りて

イ詩七十  
八〇廿五

總ての主宰となり又見ゆる所の行爲をなし給ふ故  
 に總てのものは其聖旨に歸し其命令に服従せざるな  
 じされば此尊き聖奠に就ては自らの感覺に依ること  
 なく見ゆる標に依頼することなく却て全能の神を信  
 じ恐懼と恭敬とを以て此施行を始むべし  
 (二) 是故に監督の按手によりて汝に委託せられたる職務  
 は誰の命なるやと謹みて考ふべし見よ汝任せられて  
 長老となり此聖奠を祝する爲に聖別せられたり然れ  
 ば女神の定め給ふ時に當り信實と恭敬を以て供物を



捧げ又罪科なき者の如く己を顯はさんことを務むべし此れ汝の負擔を減せられたるにあらすして却て猶狭き規律の鎖を以て己を縛り完全なる聖善を目的とす

(二) べきなり 抑長老たるものは宜しく諸の徳義を備へ他人の爲に言行の善き模範となるべし又其交際は一般世俗の常道によらず天に在る天使及び地に在る充全なる善人と共に交はるべきなり

夫れ長老は聖衣を着け基督に代りて己の爲又民の爲謙遜りて恭しく神の恵を求むべし聖衣の前後にある

十字架の標章は主の苦惱を思ひ起さん爲にして其前にあるものは主の行ひ給ひし蹟を見て熱心之に従はん爲なり又後にあるものは他より害を加へらるゝも忍びて之を受けんが爲なり且夫れ前にある十字架は己の罪を悔む爲にして其後にあるは人の罪を憐み一人の過を悲み神の罪人の媒介者とせられしことを覺ゆんが爲なり故に神の恵を受くるまで絶えず祈禱と聖なる供物を捧ぐることを怠るべからず長老此聖奠を祝する時には神に榮譽を歸し天使を歡ばしめ公



會の徳を建て生くる者を枯け死したる者に安息を求め己の爲に諸の善を領るなり

第六章 聖餐前の準備を尋る事

(一) 主よ我主の至尊なること、我至賤なることを思ひ至るるときは則ち自ら戦慄さ且慚愧るなり若しわが主の前に到らざれば自ら生命の源を離る又宜しきに適はず強て主に近付けば恐らくは輕慢の罪を犯さん我神よ主は我を助け頼みなきの時に我に教を示し給ふものなり我今如何になすべしや

願くは主よ正しき路を我に示し聖餐を領くるに方り相當なる短き準備を我に命じ給へ我謹て是聖餐を領け此最も大なる神の供物を祝する爲に熱心と恭敬を以て自身の準備をなすの方法を知るは大に我が益となるなり

第七章 内心を詳省し悔悛の志を定むる事

(一) 主曰く神に仕ふる長老は第一聖餐を祝し之を受授するに至らば心を充分に謙遜し恭しく祈り信仰を完ふ



し只管神に榮譽を歸することを志すべし  
 故に詳かに己が心を省み力を竭して確實に悔い痛み  
 又謙遜りて罪を懺悔し以て之を洗淨し主の前に至る  
 時阻碍となるべき心の累を悉く取除くべし汝總て  
 の罪を痛恨し殊に日々犯したる過を泣き悲み若し  
 時あらば宜しく神の前に於て己が情慾によりて起り  
 し苦難を心の中に懺悔すべし嗚呼汝自ら悲痛すべし  
 事甚多きにあらすや汝今尙肉に屬し世塵に纏はれ  
 情慾を壓へず惡慾に充ち五官の忘働を謹ます虚説に

或ひ外相に荒み内心の修整を怠り輕しく笑ひ戯れ  
 て悲み悔むこと遅く急に寃に趨りて身の安樂を事と  
 し嚴格を守らず熱心を起すこと緩く新奇を聞き華美  
 を見るを好み賤業を爲すを厭ひ貪りて多くの物を持  
 たんとすれども施すことを吝み却て堅く貯藏せんと  
 し言語を謹まらず口を緘ること難く禮節正しからず事  
 を爲すに劇忙し飯食を節せず聖訓を聞くことを喜ば  
 ず安息に疾くして業に就くこと遅く雑談を聞く時は  
 醒め祈禱を爲す時は眠り祈禱の終りを急ぎ心外に放



逸して祈禱に意を留めず常禱の課程を怠り聖餐を祝  
するに熱心薄く之を領くるも潤なく心外に在りて内  
常に平坦かなること少なく俄かに怒りを發し易く人  
に逆ふことを慎まず輕しく人を判し嚴しく人を責め  
利を見れば喜び苦逆の域に遇へば落膽し多くの善志  
を立るも之を成し遂ぐることも少なし  
凡そ此等其他の愆りを認めて悲痛し己が身の弱きを  
歎きて懺悔し悲みたる後其言行を改め又善き道に進  
む志を堅く立らべし

又宜しく萬事を神に委せ心を定めて我名の譽の爲に  
己を永遠の犠牲として汝が心の祭壇の上に捧げ正し  
く神に供物を奉り又宜しきに適ひて我牀の聖奠を  
領くることを得んが爲に信實を以て己の牀と魂を  
我に委托ぬべし

(二) 蓋し聖餐禮の交接の時我牀を供ふると共に純全に己  
を捧ぐるより貴き供物はあらず即ち罪を消す善き方  
法の之に優るものなきなり人若し罪の宥免しと恵を  
得んと欲して我に來る毎に力を盡し眞實に其罪を悔



ゆれば我は活る主なり我悪人の死するを好まず寧ろ  
彼が其道を離れて活んことを喜ぶなり我は彼の罪を  
記せず却て悉く之を免さん

第八章 基督の十字架上の供物及び己を捨

る事

(一) 主曰く我十字架の上に於て兩手を開展き總身を裸に  
し汝の罪を贖ひ神の怒りを宥めんが爲に心身を擧げ  
て全く父なる神に捧げたり如此汝も亦毎日聖餐を  
領くるときは全き力と愛情とを以て己を淨き供物と

なし熱心我に捧ぐべし

我汝に求むる所のものは他ならず只汝全く己を我に  
委託せんと務むるの一事なり汝の一心の外何物あり  
とも我に用なし我欲むる所のものは汝の所有にあら  
ずして只汝の心にあるなり汝若し種々の美麗しさも  
のを得るも我を得ざれば足ることなし汝又種々のも  
のを我に捧ぐるも己の心を捧げざれば我心足ること  
なし汝己を以て我に捧げ且汝全き心を以て神に捧ぐ  
れば汝の捧げものは受けらるべし我汝を救はんが爲



全く我を以て聖父に捧げ又我全き身と血とを以て汝の飲食物となせり是れ我汝のものとなり汝をして永遠無究に我ものとならしめんが爲なり然れども汝自ら其身を擅にして完く捧げて我心に委託せざれば汝の捧ぐる所未だ全きものにあらずして我全く汝と相合はざるなり  
故に汝自由と恩恵とを得んと欲せば總ての所爲の前に汝を神の手に捧ぐべし夫れ光を得心の自由を得る者少なきは全く己を捨ることを知らざるに由てなり

一主と天地の間に在る總ての物は皆主の物なり然れば我も亦喜んで我身を以て皆主に捧げ永く主の物となさんことを願ふ主よ今日我心を專にして主に仕へ

二は己の諸情と共に己を我に捧ぐべし

第九章 我身と我所有とを神に捧げ又萬民の爲に神に祈るべき事

一主と天地の間に在る總ての物は皆主の物なり然れば我も亦喜んで我身を以て皆主に捧げ永く主の物となさんことを願ふ主よ今日我心を專にして主に仕へ